

An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji*, 8

Yosuke KAWAKAMI

Center of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering

ば、和刻本の施訓者遠山荷塘は、「行情」という語を「(このような商売が) 流行(はや)る」という情況」という意味に解していたようである。「糞(くそ)みたいなものを売って歩くこのような商売が、まだこんなにも流行(はや)るなんて(とんでもない)」と理解すれば、それなりに意味は通るが、「行情」の原義は、あくまでも「市場価格」であり、「要求する」という意の動詞「要」[yào]の目的語として用いられていることから、「まださらに、このような高い価格を要求するのか」と素直(すなお)に読んで差し支(つか)えないように思われる。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第一五話。やはり「目の悪い人」を揶揄(かた)った話である。今回は、農業で使用する「肥やし」として売り歩いている「人糞(じしふん)」を、小エビをペースト状(味噌状)に発酵させた調味料「アミの塩辛(しおから)」と見間違えた、という話。日本語でも「糞味噌」と言う通り、古来「糞」と「味噌」とは見た目が似ているものである。

ただ、この話の味噌は、ウンチの匂いをクンクン嗅いだ後でも、「ゲゲゲ、これはウンチやないか。」と正しいツツコミを入れるのではなく、「こんな臭いものに金を出す奴(やつ)の気が知れん。」などと言い、「ウンチのような匂いを発しているそのモノ」が、それでもやはり「ウンチ」ではなく、あくまでも、かなり強い臭みのある発酵食品か何かだと思いつけているところであろう。小エビを発酵させた塩辛(しおから)ならば、このように強烈な悪臭が漂うことも、決してあり得ないことではないからである。

この話は、要するに、「目の悪い人」ならば、多少の匂いは感じながらも、珍味(ちんみ)と称してウンチのミンチを食べることもあるかもしれない、という話である。

ちなみに中国には、「臭豆腐[chou dòufu]」と称する、耐えがたい匂いを発する個性的な発酵食品が、今もある。もちろん、日本にも、「くさや」や「鮎(な)寿司」など、これに類する発酵食品は、いくつもある。したがって、類似的な笑話が生み出される下地は我々も十分に有しており、同種の笑いを共有することが十分に可能ということである。

ある。ただし、あまりにも尾籠すぎる、この種の笑いを好むかどうかは、個人的な嗜好(こう)によるうが、正直なところ(人目がなければ)、この手の話には、誰もがニヤリとほくそ笑んでしまうものなのではなからうか。

(附記)

本稿は、令和三年度科学研究費補助金(基盤研究C、課題番号一七K〇二四五六「東アジアの笑話と日本語・日本文学に関する複合的研究」)による研究成果の一部である。

書き下し文

蝦醬

一郷人糞いぢきやうじんくそを挑にふて経過けいこうす。近視きんし喚よびて曰いはく。蝦醬かしやうを拿もち来きたれ。郷人きやうじん知しらず。急に挑てうして走ゆく。近視きんし趕かん上じやうし。手てを將もつて糞くそ一いっ把ぱを握にぎり鼻上びじやうに于おて之これを聞きく。乃すなはち罵ののり道みちふ。臭しうなること已すでに臭しうなり了れうす、什麼なにの奇貨きくわなれば。還また這等しやうとうの行かう「音おんは杭かうなり」情じやうを要えうす。

現代語訳

ある田舎者いなかものが、ウンチを担いながら通りかかった。近眼きんがんの男おとこが（それを見て）、大きな声で、こう言った。

「アミの塩辛しおからを、こっちに持つて来い。」

ところが、田舎者いなかものは（自分が呼よばれたことに）気が付しかず、急いぎ足あしで荷物にものを担いいで立ち去はなつたので、近眼きんがんの男おとこは、走はしつて（田舎者いなかものを）追おいかけた。（その荷物にものがアミの塩辛しおからだと思い込んでいる近眼きんがんの男おとこは）田舎者いなかものに追おいつくと、手でウンチを一握いっかくり握にぎり、鼻はなで匂かいをクンクン嗅かいでから、怒鳴いかり散ちらした。

「なんやねんこれ、もう、くっさい、くっさい。こんなくっさいもんを、何をもつたいぶつて売うつとんねん。こんなもんを買かうために、金かねを出す奴やつの氣きが知れんわい。」

【和刻本割注】「行」という字の発音は、「杭 [hàng]」である。

【訳者注】右の割注は、中国原本にある原注である。「行」という字は、複

数の音をもつ多音字であり、通常 [xíng] と発音されるため、ここでは [hàng] と読まなければならないことを注記したものである。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部（三四丁裏）。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部（第二二三話、一一丁裏～一二丁表）。○蝦醬 [xiāngjiāng] ≡ 小型のエビを塩漬しおからけにし、さらに磨すり潰つぶしてペースト状（味噌状）にした調味料。アミの塩辛しおから。和刻本は、本文一行目の「蝦醬」に、左訓「アミノシホカラ」（アミの塩辛）を附す。○一郷人 [xiāng rén] = 一人の田舎者（第一〇七話「嘿面」に前出）。○挑糞 [tiāo fèn] = 大便

（ウンチ）を担いぐ。特に明清時代の中国では、耕作に使用する肥やしとして、人の大便おんを売り買かいする商売が盛んに行われた。江戸時代中期（一八世紀半ば）に日本でも和刻本が刊行された中国白話小説『照世盃』卷四「掘新坑慳鬼成財主」（清田儉叟施訓、明和二年（一七六五）大坂刊）にも、人のウンチを売うつて大儲おほもちけした男の話が収録されている。○拿蝦醬来 [ná xiāngjiāng lái] ≡ アミの塩辛しおからを（こっちに）持つて来い、という意味。「拿 [ná]」は、「持つ」という意味の動詞。「来 [lái]」は、ここでは動詞の後に置かれ、物（目的語）を話し手の方向に近付けるニュアンスを添える方向補語。「拿蝦醬来」は、「拿来」という「動詞＋方向補語」に、名詞「蝦醬」が目的語として「動詞＋方向補語」の間に挟まれたもの。現代中国語と同じ用法。○趕上 [gǎn shàng] = （…に）追いつく。「趕 [gǎn]」は、「追いかける」意の動詞。「上 [shàng]」は、動詞の後に置かれ、その動作の結果、動作の目的が達成した、または動作の対象（目的地）に到達したというニュアンスを添える方向補語。これも現代中国語と同じ用法である。左訓「ヲヒツキ」（追ひつき）。○将手握糞一把 ≡ 手でウンチを一握いっかくり握にぎるか）み取る、という意味。「将手 [jiāng shǒu]」は「手で」という意味の文語的表現。現代中国語（口語）では「用手 [yòng shǒu]」と言う。「一把 [yī bǎ]」は「一握いっかくり」「一握いっかくみ」という意味の数量表現。和刻本は「一把」に左訓「ヒトツカミ」（一握いっかくみ）を附す。○于鼻上聞之 ≡ 鼻先で、その匂かいを嗅かぐ。「于 [yú]」は「於 [yú]」と同意。「…で」という意味の前置詞（介詞）。「聞 [wén]」は「匂かいを嗅かぐ」意の動詞。中国語の話し言葉では「耳で聞く」意としては用いない点に注意。和刻本は「聞」字に左訓「カグ」（嗅かぐ）を附す。○什麼奇貨 [shénme qíhuò] ≡ 何が希少価値のある商品なのか（反語表現）。こんなものは、とてもじゃないが、「奇貨」（珍しく、価値ある品物）と呼べるような大層な代物ではない、という意味。「奇」は「奇」の異体字。和刻本は「奇貨」に左訓「メヅラシキモノ」（珍しき物）を附す。○還要這等行「音杭」情 ≡ 直訳すれば、（こんなに下らない「糞」のような商品でありながら、その上）まださらに、このような価格を要求するのか、という意味になる。「行情 [hángqíng]」は「市場価格」「値段」「相場」の意（這個行業的情況）。割注「音杭」は、「行情」の「行」という文字の発音が「杭 [hàng]」である、という意味。「行」という字は、日常的には [xíng] と発音されることが多いため、このような音注を施したのである。この割注は、中国原本に存する原注である。和刻本は「行」字に右傍訓「ハヤル」を附す。これによ

chá] = 「以茶招待客人 [yǐ chá zhāodài kèrén]」。客人にお茶を出す。お茶で客人をもてなす。左訓「フルマフ」(振る舞ふ)。○視茶内鼻影〓お茶の中に映っている(自分の)鼻の影を見て、という意味。左訓「ハナノカゲサスラミテ」(鼻の影射すを見て)。○以為 [yǐwéi] = ……と思う。しばしば事実とは異なる思い込みを表す。「…」と思っていたが、実は(違う)」というニュアンスをもつ(第一〇七話「嚙面」に前出)。

○橄欖 [gǎnlǎn] = 植物の名。カンラン科カンラン属の常緑高木「カンラン」、または、その実のこと。見かけや利用方法が似ていることから、現代中国語では「オリブ」の訳語として使用されるが、植物学的には無関係であると言う。本話では、(眼が悪い)ためお茶に映った自分の鼻の姿を「橄欖の実」だと思い込んだ(勘違いした)、という意味。○撈摸 [lāomō] = (水中のものを)手探りで、掬い取る。左訓「スクヒサクル」(掬い、探る)。○輒 [zhé] = (…すると)すぐに。現代中国語の副詞「就[jiù]」に近い。○撮起 [cuō qǐ] = 指で抓み上げる。「起[qǐ]」は、動詞の後に置かれ、その動作の結果、物が上方向に移動するニュアンスを添える方向補語。現代中国語と同じ。左訓「ツマミアケ」(抓み上げ)。○俛力一咬 [fǔ lì yī yǎo] = 思ひつきり、ガブリと咬む。「俛[fǔ]」は「儘」の略字。現代中国語(簡体字)では「尽」と表記される。「儘力[jìn lì]」は「全力を尽くして」という意味。『初刻拍案驚奇』巻六「酒下酒趙尼嫗迷花。機中機賈秀才報怨。」に「狄氏心裡愛得緊。只怕他心上不喜歡。極意奉承。滕生也儘力支陪。打得火塊也似熱的。過得數月。其夫歸家了。畧畧踪踪稀些。(狄氏は心から彼を愛したので、彼が喜ばないようなことがあつてはならぬと、出来るかぎり言うなりに尽した。滕青年の方でも若さのかぎり彼女を愛撫した。そうして数月すると夫が帰つて来たので、めつたに会うことは出来なくなった。)」(本文は、東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫蔵、消閑居刊本、日本語訳は、全譯中國文學大系『拍案驚奇(一)』(辛島曉訳、東京、東洋文化協會、一九五八年、二〇七頁)による)とある。「一咬[yī yǎo]」は、「一回ガブリと咬む」意。左訓「セイイッパイカム」(精一杯、咬む)。

○啐[cǔ] = チェツ。ベツと唾を吐くときの擬音語。和刻本は、右傍訓に「イ、」(不満の意を表す擬音語)を附し、本話の最後に割注で「啐」字の注釈を施している(後出)。○道[dào] = 思う。和刻本は、右傍訓「ヲモフ」(思ふ)を附す。○原来[yuánlái] = 文言(中国語の書き言葉)では日本語の「元来」という意味で用いられることもあるが、白話(中国語の話し言葉)では、それまで気付かなかったことが明らかになり、

ハツとする気持ち、「なんとなくであつたのか」「あ、そういうことだったのか」という驚きを表す副詞として用いられる第一〇五話「兄弟認匾」の語注参照。○紅棗[hóng zǎo] = 赤い棗。干した棗。左訓「ナツメ」(棗)。○「啐」不満時。発ス此聲。無字義。」(割注) = この割注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第一四話。前話同様、眼の悪い人を揶揄った話である。まずは、湯飲みの中のお茶に映った自分の鼻の影を(オリブの実のような)橄欖の実と見間違え、さらには、それを掬い取るうとして、お茶に指を突っ込んで、取れない取れないとイライラし、挙げ句の果ては、指をガブリと咬みちぎって、指から血が出ているのを見て、なんだ橄欖ではなく棗であつたかと、最後は自分の血豆までを棗の実と見間違つてしまふ、という話である。自分の指から血が出ているのだから、痛みを伴うはずであるが、この男は、もはや「下近眼」だけでなく、痛みに対しても鈍感だったということであろう。

⑪⑩蝦醬 (アミの塩辛)

原文

蝦醬

一郷人挑糞經過。近視喚曰。拿蝦醬來。郷人不。知。急挑而走。近視趕上。將手握糞一把。于鼻上聞之。乃罵道。臭。已。了。什麼。奇貨。還要這一行。音杭。情。

「…じや」「…だぜ」のように、砕けたニュアンスを添える。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第一三話。またしても、近眼の人を揶揄った話である。今回は、酒の席で向かい合った髭面の男が真つ赤に熟した柿を食べているのを見て、「黒い雲が太陽に懸かっている(烏雲接日頭)」と勘違いした、というものの。目の前にいる人が手にしている「真つ赤な柿」を、地平線の彼方に見えるはずの「真つ赤な太陽」と見間違え、目の前にいる人の「真つ黒い口髭」を、地平線の彼方に見えるはずの「真つ黒い雨雲」と見間違えるなど、常識的には考えられないが、そのようなあり得ない状況を誇張して描き出すことによって、「下近眼」の人間を揶揄おうとしている、ということであろう。このような「下近眼」は、現実的には、もはや「弱視」のレベルであろう。

「笑いのツボ」としては「非常識なまでの下近眼を揶揄った話」と捉え、さらには「髭に埋もれた真つ赤な柿」を「真つ赤な太陽が黒雲に懸かっている」風景に見立てた、「極めて絵画的で美しく、そして尚且つ可笑しい話」と鑑賞しておけばよからう。

⑩9 鼻影作棗 (鼻の影が棗になる)

原文

鼻影作棗

近視者拜客。主人留坐待茶。茶菓吃完。視茶内鼻影。以為橄欖也。撈摸不已。久之忿怒。輒用指撮起。俾力一咬。指破血出。近視乃仔細認之曰。啐。我只道是橄欖。却原来是箇紅棗。啐。不滿時。發此聲。無字義。」

書き下し文

鼻影 棗を作す

近視者 客を拜す。主人 留坐して茶を待す。茶菓 吃し完て。茶内の鼻影を視て。もつて橄欖と為し。撈摸して已まず。久して忿り極り、輒ち指を用て撮起し、儘力一咬す。指 破れ血出づ。近視 乃ち仔細に之を認めて曰く。啐。我只道 是 橄欖と 却て 原来是 一箇の紅棗なり、「啐は。不満の時。此の声を発す。字義 無し。」

現代語訳

近眼の人が、ある人のお宅を訪問した。そのお宅の御主人は、(近眼の人を)家に引き留め、お茶を振る舞った。(近眼の人は) お茶菓子を食べ終わり、お茶の中に映っている(自分の)鼻の影を見て、橄欖の実だと思い、何度も何度も(お茶の中に指を突っ込んで) 掬い取ろうとした。ずいぶん長い間悪戦苦闘した挙げ句、(いくらやっても橄欖の実を掬い上げることはできないので、イライラして、ついに) 怒り狂い、指でグイッと掴み上げ、思いっきりガブリと咬みついたところ、指(の皮)は破れ、出血した。近眼の男は(その傷口を) まじまじと眺めながら、こう言った。

「ちつ。わしは橄欖の実だと思っていたが、なんだ、赤い棗の実じゃったか。」

【和刻本割注】「啐[cut]」という字は、不満を感じたときに発する擬音語であり、この文字自体に意味はない。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三四丁表裏)。「新鐫笑林広記」卷之四・形体部(第二二二話、一一丁裏)。○鼻影作棗[bī yǐng zuò zǎo] = (湯飲みの中のお茶に映った、自分の)鼻の影が(真つ赤な)棗の実になった、という意味。○拜客[bài kè] = 誰かの家を訪問する(「拜訪客人[bàifǎng kèrén]」意。第一〇五話「兄弟認匾」の冒頭に見える「同拜一客」(三兄弟が)一緒にある人の家を訪問する)と同じ。「拜」は「拜」の正字(旧字体)。常用漢字「拜」は「拜」の略字である(前出)。○留坐[liú zuò] = (客人を)引き留め、座らせる。左訓「ヒキトメテ」(引き留め)。○待茶[dài chá]

た。男は言った。

「買うか買わないかは、わしの自由じゃろが、この野郎。なんでわしの顔に唾
なんぞ吐きかけやがるんじや。いったいこれは、どういふつもりや、糞くそつたれ。」

そして、服の袖でウンチを拭き取り、こう言った。

「こん畜生、ほんまに臭い口をしていやがる。こんなに臭い奴と、商売の話な
んぞしていられるか。」

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第二二話である。前話に引
き続き、やはり近眼の人を揶揄からかった話。今回は、ガチヨウを抱えた人の姿を、布の束
を抱えた布売りで見間違えたというもの。そしてさらに、ガチヨウの尻の穴から勢い
よく顔にドバツと汁っぽいウンチをぶっかけられたのを、人に唾つばを吐きかけられたの
だと勘違いしている、というものである。実に御目出度い話と言うべきであろう。

⑩ 烏雲接日 (太陽に暗雲が垂れ込める)

原文

烏雲接日

近視者赴宴。對席一鬚子吃火硃柿。即起別主人曰。路遠告辭。
主曰。天色甚早。荅云。恐天下雨。那邊烏雲接日頭哩。

書き下し文

烏雲 日に接す
近視者 宴に赴き。對席の一鬚子 火硃柿を吃す。即ち起て主人に別れ曰く。路遠
し 告げ辞す。主曰く。天色 甚だ早し。荅て云く。恐くは天 雨を下さん。那邊
の烏雲 日頭を接するなり。

現代語訳

近眼の人が宴会にやって来た。向かい側の席にいた髭面の男は、真っ赤に熟した

柿を食べていたのだが、(それを見ると、近眼の男は) すぐさまスツと立ち上がって、
主人に向かつて、

「家までかなり距離がありますので、これで失礼いたします。」

と挨拶して帰ろうとした。主人は言った。

「まだまだ時間はたっぷりあるじゃないか。」

すると、(近眼の人は) 答えて言った。

「雨が降ってくるのではないかと心配なんです。あの辺り、黒雲が太陽に懸かって
おりますので。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三四丁表)。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部(第
二六一話、一一丁裏)。○烏雲[wūyún]≡黒い雲。暗雲。○一鬚子[yī hūzǐ] = 一
人のヒゲの男。厳密には、「口ひげ」のことを「鬚[hū]」と言ひ、「あひげ」のこ
とを「鬚[xū]」と言うが、一般的に「ひげ」全般のことを「鬚子[hūzǐ]」と言う。
ここでは、そのような「ひげ」を蓄えた男の意。○火硃柿[huǒ zhū shì]≡真っ赤な柿。
真っ赤に熟した柿。「硃[zhū]」は「朱[zhū]」(赤い)という意の形容詞に通じる。
ただし、「火硃柿」という語については、中国文献の用例未詳。左訓「ジユクシカキ」(熟
し柿)。○別[bié]≡別れる。ここでは、「別れ」の挨拶をすること。左訓「イトマゴヒ」
(暇乞ひ)。○告辞[gào cí]≡(訪問先の主人に) 退席の挨拶をする。暇を告げる。
「失礼します」と言つて退席する場合、現代中国語でも「告辞了[gào cí le]」と言う。
左訓「オイトママフス」(お暇申す)。○恐天下雨≡あたら雨が降りそうです、雨が降つ
てくるのではないかと心配です、という意味。「天[tiān]」は「空」の意。「下雨[xià
yǔ]」は「雨が降る」意。現代中国語文法では「存現文」と呼ばれる構文で、意味上
の主語である「雨」が、動詞「下」の後に置かれる。○天色[tiānsè]≡もともとは
「空の色合い」のことだが、転じて「時間」「時刻」の意。本話では、まだまだそんな
に慌てて家に帰るほどの、遅い「時刻」ではないことを言っている。○日頭[rìtóu]
≡お日さま、太陽のこと。「頭[tóu]」は、音調を整えるための接尾辞であり、「あたま」
という実質的な意味はない。現代中国語と同じ。○哩[lí]≡文末の語気助詞。現代
中国語の「啦[la]」「呢[ne]」に相当する。日本語に訳すことは難しいが、「…だわ」

「折よく。うまい具合に、ちょうどそのとき。○罷 [pā] 〓 やめる。よしにする。本話では、売りたいのなら、それはそれで「もうよい」というニュアンスを添えている。和刻本は、右傍訓「ヨシ」を附す。○值得這等発急。就嘿起人来。〓 このように苛立^{いらだ}つて、人にベツと唾^{つば}を吐きかけることはないじゃないか、という意味。「値」は「値」の異体字。現代中国語(簡体字)は、この字形を採用している。「值得 [zhíde]」は、「…する値打ちがある」というのが原義だが、ここでは「…までする必要があるうか」と反語的に用いられている。「這等 [zhèdèng]」は、「このように」という意味。現代中国語「这样 [zhèyàng]」に相当。「発急 [fā jí]」は、「苛立^{いらだ}ちを起^{おこ}す」意。「就 [jiù]」は、「(…して) すぐに」という意味の副詞。「嘿起人来」は、「勢いよく噴出する」意の動詞「嘿 [hēi]」に、「上に向かって起き上がる」ニュアンスを添える複合方向補語「起来 [qǐ lái]」が附いた形。ここではさらに、複合方向補語の間に、動詞「嘿」の目的語「人 [rén]」が挿入されている。つまり、「嘿起人来」は「人に(…を) 勢いよく噴出する」意となる。和刻本は、この文全体に、左訓「ナンデカヤウニハラタチツバキヲハキカケルトハ」(何で此様に腹立ち、唾を吐きかけるとは) を附す。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶^{ぜつ}纓^{えい}三笑』『笑府』に類話はないが、前話同様、宋元期に成立したと目される中国笑話集『笑海叢珠』(第四九話「市中買鵝」) に類話があり、その本文が、和刻本『鶏窓解頤』(宝暦二年(一七五二) 刊、寛政九年(一七九七) に『開口新話』として改題再板) に収録されている。

『笑海叢珠』の日本語訳は、『中国の笑話(笑海叢珠 笑苑千金)』(莊司格一・清水栄吉・志村良治 訳、筑摩書房、一九六六年、九九〜一〇〇頁) に備わり、内閣文庫蔵本(写本) による本文が、同書二八六頁に翻刻されている。

『笑海叢珠』所収話の原文、及び和刻本『鶏窓解頤』(改題本『開口新話』、京都大学文学部図書室・頼原文庫蔵)、『笑府』(筑波大学中央図書館蔵本) の原文は、以下の通りである。なお、内閣文庫蔵『笑海叢珠』(写本) は、「明清善本小説叢刊初編(第六輯、諧謔篇)」(天一出版社、台北、一九九五年七月) に影印が備わる。

中国笑話集『笑海叢珠』所収話、和刻本『鶏窓解頤』(改題本『訳解開口新話』、それぞれの原文は、下記の通りである。内容は『笑林広記』と同じであるが、表現が

僅かに異なるので、拙訳を添えておく。

中国笑話集『笑海叢珠』第四九話(「明清善本小説叢刊初編(第六輯、諧謔篇)」二五頁)

市中買鵝 笑近視

有人近視入市雜買。忽有一人抱一鵝賣。其人以手橫著鵝背曰「我不要買。賣者復以鵝後示之。其人以手摸之。曰。我不買綿。不覺鵝糞澣其面。其人曰。買不買在我。豈得便唾我面。是何理也。以袖拭之曰。這廝口臭。如何与它商量買賣」

和刻本『鶏窓解頤』(改題本『開口新話』) 第一八話(架蔵本、八丁表裏)

市中買鵝

有^レ人近^レ視。入^レ市^ニ雜^ニ買^ス。忽^ニ有^二一^一人抱^二一^一鵝^ヲ賣^ル。其^一人^ニ以^レ手摸^ニ着^{シテ}鵝^ノ背^ヲ。曰。不^レ要^ニ買^フ鵝^ヲ。賣^者復^テ以^レ鵝^ノ後^ヲ示^ス之^ニ。其^一人^ニ以^レ手摸^ニ鵝^ノ之^ヲ。曰。我^レ不^レ買^ニ綿^ヲ。不^レ覺^ニ鵝^ノ糞^ヲ澣^ス其^一面^ニ。其^一人^ノ曰。買^ト不^レ買^ハ在^レ我^ニ。豈^ニ得^二便^一唾^ニ我^ノ面^ニ。是^レ何^ノ理^{ナリ}也。以^二袖^一拭^フ之^ヲ。曰。這^一廝^ノ口^ニ臭^シ。如^ク何^ノ理^{ナリ}。商^ニ量^ニ買^フ賣^フ之^ヲ。未^レ有^レ之^レ。」

市場でガチヨウを買う(原注、近眼の人を馬鹿にした話である。)

ある近眼の人が、市場であれこれ買い物をしていたところ、突然一人の男が、売り物のガチヨウを一羽抱きかかえながら現れた。近眼の男は、ガチヨウの嘴^{くちばし}を手で撫^なでて、こう言った。

「こいつは、要らねえ。」

ガチヨウを売りに来た男が、今度はガチヨウのお尻を近眼の男の方に向けると、近眼の男は、ガチヨウの尻を手で撫^なでながら、こう言った。

「わしは、綿^いは要らねえんだ。」

そのとき思いがけず、なんとガチヨウが男の顔にウンチをプシュッと噴^ふきかけ

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第一一話である。前話に引き続き、近眼の人を揶揄った話。具体的には、目が悪すぎて、石の上にカラスが留まったのを、黒い帽子を被った人の姿と見間違え、ここはどこかと何度も何度も訊ねたのに、完全に無視され(石の上に留まったカラスが、人間の質問に答えるはずもないのだが)、挙げ句の果ては、カラスが飛び去っても、それがカラスだということに気が付かず、その人の被った黒い帽子が風に吹き飛ばされたのだと勘違いし続けるということと間拔けた態度を取る「下近眼」の人の話である。

もちろん、現実的にはカラスの羽音なども耳に入るのであるから、最後までカラスを黒い帽子と勘違いし続けるなどということはあり得ないだろうが、そんなバカなことがあつてたまるかという、極端な誇張によるナンセンスギャグと見なすこともできよう。

本話は、その可笑しな光景がまざまざと目に浮かぶような、実に「絵」になる話である。個人的には、映画『吾輩は猫である』(市川崑監督、一九七五年)に登場する「俳劇」のシーンが思い出される。

⑩ 囁面 (顔にドバツとぶっかける)

原文

囁面

一 郷人 携^レ鵝^ヲ入^レ市^ニ。近^ニ視^見之^ヲ。以^テ為^シ賣^布者^ト。連^リ呼^レ買^ハント布^ヲ。郷人 不^レ應^セ。
急^ニ上^前。勸^ニ住^鵝尾^ヲ。逼^ツ而^レ視^之。鵝 忽^チ撒^シ屎^ヲ。適^ニ噴^ク其^ノ面^ニ。近^ニ視^怒曰^ク。
不^レ賣^バ就^レ罷^ヨ。值^下得^シ。這^ニ等^ニ發^シ急^シ。就^チ喫^ニ起^シ人^ニ來^上。

書き下し文

面に喫す

一 郷人 鵝を携て市に入る。近視之を見て。以て布を売る者と為し。連りに布を買はんと呼ぶ。郷人 応ぜず。急に上前して鵝尾を勸住して。逼つて之を視る。鵝 忽ち尿を撒し。適に其の面に噴く。近視 怒て曰く。売らざれば就ち罷。這等

に発急して。就ち人に喫起し来るに値り得ん。

現代語訳

田舎から出てきた人が、ガチョウを抱えて市場にやって来た。近眼の人がこれを見て、布の生地を売りに来たのだと勘違いして、「布を買いたい」「布を売ってくれ」と何度も何度も呼びかけた。しかし、その田舎者は、うんとおすんとも言わない。(近眼の男は)グッと前に進み出て、ガチョウの尻尾をギョツと掴み、顔をグイッと近付けた。するとガチョウは、突然ブシュッと尿を垂れ、正しくどんぴしゃ、男の顔面に噴射した。近眼の男は、カンカンに怒って言った。

「売りたいなら、売りたいのでええやないか。こんなふうに腹立ち紛れにドバツと唾を吐くことないやろが。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三四丁表)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第二六〇話、一二丁表)。○囁面 [xùn miàn] ≡ 顔に(勢いよく、口に含んだ水を)噴き出す。顔にベツと(液状のものを)飛ばす。通常は、口の中の水や唾を飛ばす意で用いられるが、本話では、ガチョウが肛門から汁っぽい糞を噴出する。○郷人 [xiāng rén] ≡ 郷下人 [xiāng xià rén]。田舎の人、田舎者。○鵝 [ē] ≡ ガチョウ。○以為 [yǐwéi] ≡ …と思う。しばしば、事実とは異なる思い込みを表す。「…と思っていたが、実は…」というニュアンスをもつ。現代中国語と同じ。本話では、ガチョウを抱えている人の姿を見て、売り物の布を持っている人だと「勘違いした」という意味。やはり事実と反する思い込みの表現である。○上前 [shàng qián] ≡ 前に進む。前に出る。左訓「ヲヒツキ」(追ひつき)。○勸住 [quàn zhù] ≡ しつかりと縛り付ける。「勸 [quàn]」は、「縛り付ける」意の動詞。「住 [zhù]」は、動詞の後に置かれ、その動作がしつかりと定着するニュアンスを添える結果補語。「勸住」二字で、「しつかりと縛り付ける」「ギョツと掴んで離さない」意となる。左訓「ヒキトメ」(引き留め)。○逼 [bī] ≡ 近寄る、詰め寄る、グツと近づく。本話では、ガチョウの尻にグツと顔を近付けた、ということ。○撒尿 [sǎ niào] ≡ 尿を垂れる。ウンチをする。「撒 [sǎ]」は「放出する」意の動詞。「小便をする」場合は「撒尿 [sǎ niào]」と言う。○適 [shì]

語は、現代中国語においても（簡体字では「答应」と表記されるが）、日常的に頻繁に用いられる口語語彙。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶三笑』『笑府』に類話はないが、宋元期に成立したと目される中国笑話集『笑海叢珠』（第四七話「問路石人」）に類話があり、その本文が、和刻本『鶏窓解頤』（宝暦二年（一七五二）刊、寛政九年（一七九七）に『開口新話』として改題再板）に収録されている。

『笑海叢珠』の日本語訳は、『中国の笑話（笑海叢珠 笑苑千金）』（莊司格一・清水栄吉・志村良治 訳、筑摩書房、一九六六年、九六―九七頁）に備わり、内閣文庫所蔵（写本）の本文が、同書二八五頁に翻刻されている。

『笑海叢珠』所収話の原文、和刻本『鶏窓解頤』（改題本『開口新話』、京都大学文学部図書室・頼原文庫蔵）、『笑府』（筑波大学中央図書館蔵本）の原文は、以下の通りである。『笑海叢珠』本文の翻刻は、『中国の笑話（笑海叢珠 笑苑千金）』に、内閣文庫蔵写本と上村幸次氏旧蔵写本（油印本）によって莊司格一・清水栄吉・志村良治の三氏が校訂した本文が備わるほか、原文の影印が、「明清善本小説叢刊初編（第六輯、諧謔篇）」『4 笑海叢珠 5 笑苑千金 6 雅笑篇 7 听子』（天一出版社、台北一九九五年七月）に収録されている。なお、中国笑話集『笑海叢珠』『笑苑千金』及び和刻本『鶏窓解頤』（『開口新話』）については、拙稿「『開口新話』小考」（『国語国文』第八十八巻第十二号、令和元年十二月）を参照。

中国笑話集『笑海叢珠』所収話、和刻本『鶏窓解頤』（改題本『訳解開口新話』）の本文は、次の通りである。拙訳を添えておく。

中国笑話集『笑海叢珠』第四七話（『明清善本小説叢刊初編（第六輯、諧謔篇）』（二四頁）

問路石人 笑近視

昔有人近視。迷路。見路傍古墓边有石人。前去問之。先是有烏鴉

立于石人頭上。見人來飛去。其人問路於石人。石人不聲。其人曰

我問你路。不説与我。你落了頭中。我亦不説与你

和刻本『鶏窓解頤』（改題本『開口新話』）第一七話（架蔵本、八丁表）

問路石人

昔有レ人近視也。迷路ニ見路傍ノ古墓邊ニ有ル石人。前ミ去問レ之。先是 有ニテ烏鴉立三子石人ノ頭上ニ。見ニテ人ノ來ヲ飛ヒ去。其人 問フ路ヲ於石人ニ。石人 不聲セ。其人ノ曰。我問ニトモ 你ニ路ヲ不説ニ與我。你 落ニセルモ丁頭巾ヲ。我モ亦不説ニ與你。イハヌカラハ。ヲトシミレド。シラセマイ。

石像に道を訊ねる（原注、近眼の人を馬鹿にした話である。）

むかしむかし、ある近眼の人、道に迷ってしまったので、道端の古いお墓のほとりに立っている石像を見つけると、それに近寄って行って、道を訊ねた。

石像の頭の上にはカラスが留まっていたのだが、人がやって来るのを見て、飛んで行った。

男が石像に道を訊ねたのに、石像はうんともすんとも言わない。そこで、男は言った。

「わしがお前に道を訊ねているのに、お前は返事もしない。そういうことならばわしだって、お前の頭巾が落っこちてしまったとしても、何も教えてやらんからな。」

なお、明治十九年（一八八六年）に「版權免許」を受けた『開卷百笑』（蘭厓逸史（岩本吾一）纂譯、金櫻堂梓）に、『笑林広記』所収話の日本語訳が掲載されているので、それも紹介しておく。

明治刊本『開卷百笑』（蘭厓逸史（岩本吾一）纂訳、明治一九年（一八八六）版權免許）第六三話（架蔵本、四〇頁）

近視 迷路

一人ノ近視 迷ヒ道傍ノ石上ニ棲歇スル一鴉ヲ見テ疑フヲ

クハ是レ人ナリト遂ニ再三之レニ詰フテ路ヲ問フ少頃ニシテ

鴉 飛ビ去ル其ノ人曰ク我レ汝ニ路ヲ問ヘドモ汝 應答セズ汝

ガ帽子 風ニ吹キ去ラル、モ我レ汝ニ對シテ教ヘズ

評 汝デ 視ズヤ 翼アルノ帽子

安易な「落とし方」と言うべきかもしれない。

また、本話には「読み間違えの話」としての「笑いのツボ」もある。ここでは「遺精堂」という語を「遺精室」「道情堂」に読み違えており、確かに字形は似ているので見間違えることはあり得ようが、莊嚴であるべき「遺精堂」（先人の遺してくれた清らかさを湛えた広間）という語、今は亡き先人の縁を偲ぶために名付けられたであろう堂号が、「道情堂」（道徳を重んじる広間）と読み間違えるのならまだしも、事もあろうに「遺精室」（夢精の部屋）などと勘違いしてしまうのは、あまりにも不埒極まりないものであり、甚だしく下品だが、「笑える」ポイントではあろう。

なお、松枝茂夫氏は、この「遺精」に関する本文を「腎虚を患っておられる」と訳しているが（岩波文庫『全訳笑府（下）』一九八三年二月、一〇五頁）、「遺精」[yīng]は、現代中国語のニュアンスを汲んで、「夢精」または「射精」という意味の俗語と理解した方が、清代の中国人の語感に近いのではなからうか。ちなみに、現代中国においても、「遺精」[yīng]という語は、立派な医学・生理学用語であり、病名としても成立する。松枝氏のように、「遺精堂」を「今は亡き精子を偲ぶための堂」と捉え、「此病」を「腎虚」と訳するのは、中国語の「文言」（古典的な書き言葉）的な解釈であり、「白話」（中国語の飾らない話し言葉）的な解釈ではない。そして、笑話を読解する場合、「白話」的＝「俗語的」な解釈が、しばしば正解に近い。

⑩ 問路（道を訊ねる）

原文

問路

一近視 迷路。見道傍ノ石上ニ棲一鴉。疑是人一也。遂再三詰之。
少頃 鴉飛去。其ノ人曰。我問レニ你不二答應。你的帽子被風吹去リ了。
我モ也不二對レニ你说。

書き下し文

路を問ふ

一近視 路に迷ふ。道傍の石上に一鴉の棲歇するを見て。是人かと疑ひ。遂に再

三之を詰す。少頃あつて鴉 飛び去る。其の人曰く。我 你に問ふに答へせず。你的帽子 風に吹き去り了せらる。我モ也 你に對して説かず。

現代語訳

ある近眼の人が、道に迷ってしまった。道端の石の上に一羽のカラスが留まっているのを見て、

「おつ、人がいるではないか。」

と思い、何度も何度も（道に迷ったのですが、ここは一体どこですか。」と）訊ねたところ、しばらくして、カラスは（もちろん何も返事をせずに）飛び去って行った。そこで、この（近眼の）人は言った。

「わしの質問に対して、お前はうんとすんとも言いやらん。（お前がそういう態度を取るならば）わしだって、お前の帽子が風に吹かれて飛んで行こうが、（何も）言うてやらんからな。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部（三三丁裏）。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部（第二五九話、一一丁表）。○棲歇 [qīxiē] = （鳥が羽を休めるために、木などに）留まる、身を寄せる、仮寓する意。左訓「トマル」（留まる）。中国語原文は「棲歇一鴉」となっており、意味上の主語である「一羽のカラス」が動詞の後に置かれているが、これは動詞「有」[yǒu]を伴う文の構造（「場所」＋動詞＋「存在する人やモノ」＝「場所」に「人やモノ」が「存在する等」と同じものであり、中国語文法では「存現文」と呼ばれる。この文は、「道端の石の上に、一羽のカラスが、いる（道傍石上有一鴉）」という文を、「道端の石の上に、一羽のカラスが、羽を休めている（道傍石上棲歇一鴉）」に変形したものと考えれば理解しやすいであろう。和刻本の訓点は、「一鴉」にも見える版面になっているが、「一鴉」は、文法的にも（文脈的にも）意味上の主語であるから、ここは「一鴉」の誤刻、または版面の汚れであると見なしておく。○詰 [jié] = 問い質す、詰問する、問い詰める、というのが原義だが、ここでは（何度も何度も）「質問する」「訊ねる」意。左訓「タツネル」（訊ねる）。○答應 [dāyīng] = 返事をする。返答する。答える。「答」は「答」の異体字。「應」は「応」の正字（旧字体）。この

「しばらくの間。少しの時間。○妄 [wang]」でためである、滅茶苦茶である、事実と異なる、という意味。

補注

この話は、『笑府』巻十（第四三七話「近視」）に類話がある。『笑府』の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（下）』（岩波文庫、一九八三年二月、一〇五～一〇六頁）を参照。

唐本『笑府』第四三七話（明・泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、巻十・形体部、三丁表裏）

近視

兄弟三人皆近視。同拜一客。登其堂。上懸遺精堂扁。
伯曰。主人病怯耶。不然。何為寫遺精室也。仲曰。不然。
主人好道。故寫道情堂耳。二人爭論不已。以季弟少
年目力。使辨之。季弟張目曰。汝二人皆妄。上面那得
有扁。

又近視者臨河見蘂薦浮來。認以為柴船也。呼渡
不應。跳其上溺矣。乃曰。你便不肯渡我。你的柴也
翻在水了。又見鰓魚。疑為鴨蛋。握之而腹痛。訝曰。
如何小鼻任出得快。

なお、本話は、和刻本『笑府』（明和五年（一七六八）京都刊、半紙本、上巻、一七丁表）
第七六話に収録されている。和刻本『笑府』所収話の原文は、以下の通りである。引
用は、京都大学附属図書館蔵本に拠るが、「嘶本大系」第二十巻（武藤禎夫編、東京
堂出版、一九七九年、二二七頁）にも影印が備わる。

和刻本『笑府』（明和五年（一七六八）京都刊、半紙本、京都大学附属図書館蔵本、

巻上、一七丁表）第七六話

兄弟三人皆近視 同拜一客 登其堂 上懸遺精堂扁

伯ノ曰 主人病怯ヲ邪 不レハ然 何為レツ 寫ニ遺精室ト也 仲ノ曰 不
レ然 主人好道ヲ 故ニ寫ニ道情堂ト耳 二人爭ニ論レ不レ已マ 以ニ季
弟少年ノ目力ニ使レ辨レ之 季弟張目曰 汝二人皆妄ナリ 上
面那ノ得レ有レルコトヲ扁

また、明治十九年（一八八六年）に「版權免許」を受けた『開卷百笑』（蘭厓逸
史（岩本吾一）纂譯、金櫻堂梓）に、『笑林広記』所収話の日本語訳が掲載されてい
るので、ここに紹介しておく。

明治刊本『開卷百笑』（蘭厓逸史（岩本吾一）纂訳、明治十九年（一八八六）
版權免許）第九二話（架蔵本、五四頁）

近視 三人

兄弟三人アリ 皆近視 同ク一客ヲ拜ス 其ノ堂ニ登ル 上ニ遺精堂
ノ扁ヲ懸ケ 伯曰ク 主人 病ヲ病ムカ 然ズンハ 何ゾ寫シテ遺精ノ
室ト爲ス 仲ノ曰ク 然ズ 主人 遠ヲ好ム故ニ 道情堂ト爲ス耳 二人
爭論 已マズ 季弟 少年ノ目力ヲ以テ之レヲ辨ゼシム 季弟 目ヲ
張ツテ曰ク 汝チ二人 皆忘ナリ 上面 那ゾ 扁アルヲ得ン

余説

本話は、「形体部」（人間の身体的特徴に関する部門）の第一〇話である。『訳解笑
林広記』第一〇二話「瞽笑」から第一一一話「拾螞蟻」までの計一〇話は、「眼の
悪い人」（盲人、近眼）を揶揄った話である。

第一〇五話「兄弟認匾」は、近眼の三兄弟が誰かの家を訪問し、広間の上に掲げ
られた匾額の文字を「ああでもない」「こうでもない」と言い争う、というもの。笑
話全体のオチとしては、さんざん議論した挙げ句、三人のなかで最も視力がよいとさ
れる一番下の弟が登場し、正当な裁きを下してスッキリするかと思いきや、弟はなん
と「そもそも匾額などというものが、この広間のどこにある。」と言った、という話
である。つまり、最も信頼できると思っていた人物が、実は最も信頼できない間抜け
であった、というオチである。この場合のツッコミは、「お前が一番アホなんかい」「そ
もそもお前には額縁すら見えとらんかったんかい」となる。『お笑い芸』としては、

⑩ 兄弟認匾 (兄弟が匾額に書かれた文字を読む)

原文

兄弟認匾

兄弟三人皆近視。同拜一客。堂上懸遺清堂一匾。伯曰。主人原来患此病。不然何以取遺精室也。仲細看良久曰。非也。想主人好道。故名道情堂耳。二人爭論不已。以季弟目力更好。使辨之。乃張目睨視半响曰。汝兩人皆妄也。上面安ぞ匾有ることを得ん。

書き下し文

兄弟匾を認ず

兄弟三人皆近視なり。同く一客を拜す。堂上に遺清堂の一匾を懸く。伯曰く。主人原来此の病を患ふか。然らずんば何を以て遺精室を取る。仲細に看ることに良久して曰く。非なり。想ふに主人道を好む。故に道情堂と名ののみ。二人争論して已まず。季弟目力更に好きを以て、之を弁ぜしむ。乃ち目を張り睨視半响して曰く。汝兩人皆妄なり。上面安んぞ匾有ることを得ん。

現代語訳

兄弟三人は、皆近眼であった。三人一緒に、ある人の家を訪問したところ、広間の上に「遺清堂（先人が遺してくれた清らかな広間）」と書かれた匾額（横長の額縁）が懸かっていた。一番上の兄が（それを見て）言った。

「ははあん。そういうことか、この家の御主人は、この病気を患っておられたのじゃない。そうでなければ、『遺精室（夢精の部屋）』などと名付けるはずがないからな。」

二番目の兄は、眼を細めて（匾額の文字を）かなり長い間じっと見つめてから、こう言った。

「違いますよ。この家の御主人は、道を好んでおられたのです。だからこそ、『道情堂（道義を重んじる広間）』と名付けたのですよ。」

二人は、「遺精室」なのか「道情堂」なのか、延々と言い争いを続けた。そこで、上の二人よりも、もっと視力のよい一番下の弟に（匾額の文字を）見極めさせることにした。（一番下の弟は）目を睨り、しばらくの間ギリギリと凝視してから、こ

う言った。

「兄さんたちは二人ともデタラメばかり言っています。この部屋のどこに、匾額などというものがあるのです。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部（三三丁表裏）。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部（第二五七話、一〇丁裏）。○匾 [biàn] 大きな屋敷の入り口、寺院の大門、庭園の亭、大広間などに掛けられた横長の板（第五〇話「進士第」、第六三話「監生自大」参照。本話では、大広間の匾額を指す。和刻本は、本文中の「匾」字に左訓「ガク」（額）を附す。○近視 [jīnshì] 近視である、近眼である。日本語と同じ。左訓「チカメ」（近眼）。○拜 [bài] 拝訪 [bàifǎng]。訪問する、お訪ねする（敬語）。○「拜」は「拜」の正字（旧字体）。常用漢字「拜」は「拜」の略字である。左訓「ミマフ」（見舞ふ）。○遺精室 [yí jīng shì] 眼の悪い兄弟が訪問したお宅の大広間に掲げられていた匾額の文字。この場合、「遺精室」は「先人が遺してくれた清らかな広間」という意味になる。○伯 [bó] 長兄。兄弟の順序を示す語。上から順に「伯仲叔季」[bó zhōng shū jì] と言う。○原来 [yuánlái] 文言（中国語の書き言葉）では日本語の「元来」という意味に用いられることもあるが、白話（中国語の話言葉）では、それまで気づかなかったことにハッと気がついたときの気持ち、「なんと〜であったのか」「あ、そういうことだったのか」という驚きを表す副詞として用いられる。後者の用法は、現代中国語と同じである。○遺精室 [yí jīng shì] 夢精の部屋。「遺精」は「精子を漏らす」意。この場合の「遺」は、「先人の遺してくれた」という意味ではなく、「遺漏 [yílòu]」（もらす）という意味。眼の悪い長兄は、文字の形が似ているため、「遺精室」と書かれた匾額の文字を「遺精室」と見間違えたのである。なお、「遺精」には「射精する」意もあり、宋・洪邁『夷堅丁志』「江南木客」に「交際訖事。遺精如墨水。多感孕成胎。」という用例がある。○仲 [zhōng] 上から二番目の兄。○好道 [hào dào] 道德を好む、道義心に厚い。○道情堂 [dào qíng táng] 道德や情義を重んずる広間。「遺精室」と同じように、近眼のため、字形の類似から、広間に掲げられた匾額の文字「遺精室」を見間違えたもの。○季弟 [jì dì] 一番下の弟。○睨視 [nìshì] じろりと睨む。じっと見つめる。凝視する。○半响 [bànshǎng]

用句「言^い得^えて妙^{めう}なり」と同じ構造。「言^い得^えて妙^{めう}ナリ」（現代中国語では「说得好 [shuō de hǎo]」は、「言う」という動作の状態が「妙（うまい）ことを表している。ただし、和刻本「臭^{くさ}し得^えて快^はき」の「臭^{くさ}し」という訓は、文法的に無理があるため、「臭」を「くさる」という意味の動詞と捉え、仮に「臭^{くさ}り得^えて快^はし」と訓み直しておいたが、日本語においては、「臭^{くさ}し」という形容詞は、通常「腐^{くさ}る」という意の動詞とは、漢字表記上、区別して用いられるため、この訓読も、やはり少し落ち着かない。左訓「ハヤクサクナリシ」（速く臭くなりし）。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶^{ぜつ}纓^{えい}三^{さん}笑^{しょう}』『笑府』に類話はないが、和刻本『解顔新話』（寛政六年（一七九四）序）に収録され、小咄本『即当笑合』（寛政八年（一七九六）序）に、「江戸小咄」として、その日本語訳が掲載されている。

『解顔新話』および『即当笑合』の原文を、京都大学附属図書館蔵本によって示す。なお、『即当笑合』は、『解顔新話』の板本を流用したものであり、標題にルビが附されている以外は、『解顔新話』の和訳部分と原則的に同一である。

和刻本『解顔新話』第三九話「吃螺」（寛政六年（一七九四）序、京都大学附属図書館蔵本、下巻、一二丁表裏）

吃螺

有^あ盲^{めくら}子^{なつ} 暑^{なつ}月^{なつ}食^く螺^{なつ} 失^と手^り墮^おス 一^い螺^{なつ}肉^{にく}在^あ地^ちニ 低^ひ
頭^{あたま} 尋^{たづね}摸^も 悞^ご検^{けん}雞^{けい}屎^し 放^{はな}在^あ口^{くち}裏^らニ 向^{むか}人^{ひと}ニ 曰^{いは} 好^{この}熱^{やう}
天^{あま}氣^き東^{とう}西^{せい}纔^{さい}落^お二^に下^げ地^ちニ 怎^{いか}就^ん這^{やう}等^{どう}臭^{くさ}得^え快^は
盲^{めくら}子^{なつ} 暑^{なつ}月^{なつ}螺^{なつ}を^をく^くふ 失^と手^りて^て地^ちへ^へ墮^おす さまぐ
尋^{たづね}摸^もて 悞^ごて 雞^{けい}の^の屎^しを^を検^{けん}て 口^{くち}裏^らへ^へ放^{はな}て 人^{ひと}に
向^{むか}つて いは^いく^くい^いか^かに 熱^{あつ}いとて 東^{とう}西^{せい}を^をち^ちつと^と地^ちへ^へ
落^おす とは^{とは}や 這^{この}等^{やう}に 臭^{くさ}み^みが^がつ^つく

和刻本『即当笑合』第七六話「吃螺」（寛政八年（一七九六）序、京都大学附属図書館蔵本、巻四、一二丁裏）

吃螺

盲^{めくら}子^{なつ} 暑^{なつ}月^{なつ}螺^{なつ}を^をく^くふ 失^と手^りて^て地^ちへ^へ墮^おす さまぐ
尋^{たづね}摸^もて 悞^ごて 雞^{けい}の^の屎^しを^を検^{けん}て 口^{くち}裏^らへ^へ放^{はな}て 人^{ひと}に
向^{むか}つて いは^いく^くい^いか^かに 熱^{あつ}いとて 東^{とう}西^{せい}を^をち^ちつと^と地^ちへ^へ
落^おす とは^{とは}や 這^{この}等^{やう}に 臭^{くさ}み^みが^がつ^つく

『解顔新話』は、一文字だけ脱字が見られる（原本「食螺螄」を「食螺」とする）が、その日本語訳には、「黄鬚」（『解顔新話』第七四話、『訳解笑林広記』第九九話）に見られたような、語法的に大きな誤りはない。

なお、『解顔新話』については、拙稿「『解顔新話』全注釈」（平成二十一年度／平成二三年度 科学研究費補助金 成果報告書「中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究」課題番号二二五二〇二一五、一〇九―一一〇頁）を参照。

余説

本話は、「形体部」（人間の身体的特徴に関する部門）の第九話である。この話も、前話に引き続き、目の見えない人を揶揄つたもの。

夏^{なつ}真^まつ盛^{さか}りのある日、盲人が、貝の身を地面に落とし、手探りで拾い上げて口に放り込んだところ、それは何と、鶏の糞であった。そこで、盲人が一言。

「いくら暑い真夏だからといって、こんなにすぐに、貝の身が（ウンコみたいに、猛烈に）あつと言う間に臭くなってしまうなんて。」

「笑いのツボ」は、もはや言うまでもなからうが、本物のウンコを食べておきながら、それとは気づかず、夏なので、食べ物があつと言う間に腐ってしまった、物が腐るそのスピードの速さには、実に驚かされる……などと言っている、本当におめでたい、いや、余りにも残念すぎる、この盲人の「勘違い」にあると言えよう。いやいや、目が見えないからウンコと貝の身を取り違えたとしても仕方がないとは言うものの、この話は、それと知らずにウンコを食べた、余りにも間抜けな、哀れで「臭い」盲人を、明るく爽やかに笑い飛ばしている、とも言えようか。

⑩4 吃螺螄 (タニシを食べる)

原文

吃二螺螄^ヲ

有^ニ盲子^一暑^ニ月食^ニ螺螄^ヲ。失^レ手^ヲ墮^ス一螺^一肉^一在^ニ地^一。低^一頭^一尋^ニ摸^ス。悞^テ檢^シシテ
 雞屎^ヲ放^一在^ニ口裏^一。向^レ人^一曰^ク。好^ニ熱^一天^一氣^一。東^一西^一纔^一落^ニ下^一。怎^ン就^チ
 這^ニ等^一臭^ニ得^テ快^キ。
 コノヤウニ ハヤクサクナリシ

書き下し文

螺螄^ヲを吃^ス

盲子^一有^リ暑^ニ月^一螺螄^ヲを食^フ。手^ヲを失^シて一螺^一肉^一を地^ニに墮^ス。低^一頭^一して尋^ニ摸^ス。悞^ニ
 て鶏屎^ヲを檢^シして。口^ニ裏^一に放^ス在^ス。人^一に向^テて曰^ク。好^ニ熱^一天^一氣^一。東^一西^一纔^一地^ニに落^ク下^セしに。
 怎^ンぞ就^チ這^ニ等^一に臭^ニ得^テ快^キ。

現代語訳

目の見えない人が、夏の暑い盛りにタニシを食べていたところ、うっかり手を滑らせ、貝の身を一つ地面に落としてしまった。しゃがみ込んで、手探りでゴソゴソ探しまわっていたが、誤って鶏の糞を拾い、そのまま口の中に放り込んでしまった。(盲人は、もぐもぐごつくんとニワトリのウンコを呑み込んだ後、こう) 言った。

「ほんとに暑い天気ですなあ。ついさっき下に物を落としただけなのに、こんなにも速く(貝の身がウンコみたいに) 臭くなってしまうなんて。」

【訳者注】それは、あなたの食べた物が貝の身ではなく、真正正銘のウンコだったからでしょう。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(二三三丁表)。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部(第二五四話、一〇丁表)。○螺螄 [luóshí] ≡ タニシ。ニシ。マキガイ。サザエ。螺^ら旋^だ状の殻を有する軟体動物。和刻本『解顔新話』は「螺」と和訳し、小咄本『即当笑合』は、その標題に「吃螺」(榮螺を食ふ)というルビを附す。○盲子 [mángzǐ] ≡ 目の見えない人。通常、現代中国語の話し言葉では「瞎子[xiāzi]」と言う。「盲子」の「子[zǐ]」は、

名詞の語尾に附される接尾辞であり、「子ども」という実質的な意味はない。例えば、現代語「瞎子[xiāzi]」(盲人)、「茄子[qiézi]」(ナス)、「桌子[zhuōzi]」(テーブル、机)、「椅子[yǐzi]」(イス)などの「子[zǐ]」と同じ。○失手[shī shǒu] ≡ 手を滑らせる。手元が狂う。和刻本『解顔新話』は「失手て」と和訳している。○墮一螺肉在地 ≡ (手を滑らせて)貝の身を一つ地面に落としてしまった、という意味。和刻本は、「墮一螺肉在^ニ地^一」と施訓しており、「在^ニ地^一」の読み方が分かりにくい。今、「在」の送り仮名の位置にある「ニ」を、「在」字の右傍訓(「在^ニ地^一」の誤刻である)と見なし、「一螺肉を地^ニに墮^ス」と訓んでおく。なお、「在[zài]」は「…に」という意味の前置詞(介詞)。現代中国語の用法と同じ。○尋摸[xúnmō] ≡ 探し求める。「摸[mō]」は、「手探りをする」意の動詞。左訓「サガス」(探す)。○悞[wù] ≡ 誤る。間違える。「誤[wù]」と同じ。○檢[jiǎn] ≡ (落ちてゐる物を) 拾う。拾い上げる。現代中国語「檢[jiǎn]」と同じ。左訓「サグリツケテ」(探りつけて)。○雞屎[jī shǐ] ≡ 鶏の糞。ニワトリのウンチ。左訓「トリノフン」(鳥の糞)。○放在口裏 ≡ 口の中に入れる。「放[fàng]」は、「物を…に」入れる「置く」意の動詞。「在[zài]」は「…に」という意味の前置詞(介詞)だが、動詞の後に置かれ、「入れる」という動作の結果、物がその場所に移動したことを表す(結果補語)。「口裏[kǒu lǐ]」の「裏[lǐ]」は「中側」「内側」という意味の方位詞であり、日本語の「うら」「裏側」とは異なる。「裡[lǐ]」と同じ。現代中国語では「里」と表記される。○好熱天氣[hǎo rè tiānqì] ≡ たいへん暑い天気。「好[hǎo]」は、形容詞の前に置かれると、「とても」「たいへん」という意味の副詞になる。左訓「ヒドクアツイヒデハナイカ」(酷く暑い日ではないか)。○東西[dōngxī] ≡ モノ。品物。左訓「シナモノ」(品物)。○纔[cái] ≡ たった今。さっき(…したばかり)。通常は「纔」と訓み、「さっきしたばかり」と解釈するが、和刻本は「イマ」(今)という右傍訓を附す。○怎[zěn] ≡ どうして(…なのだろうか)。反語文を構成する疑問副詞。現代中国語「怎么[zěnmē]」と同じ。○這等[zhèdēng] ≡ このように。現代中国語「这么[zhème]」「这样[zhèyàng]」と同じ。左訓「コノヤウニ」。

○臭得快[chòu de kuài] ≡ (どうしてこんなに)臭くなるのが速いのだろう。「得[de]」は、動詞や形容詞の後に置かれ、その動作がどのようなものであるかを表す「様態補語」または「程度補語」を導く構造助詞。現代中国語と同じ。ここでは、「臭くなる」という動作のスピードが「快[kuài]」(速い)ことを表している。日本語の慣

四・形体部（第二五三話、一〇丁表）。○瞽者 [gǔzhě] = 盲人。目の見えない人。「瞽」は「瞽」の異体字。前出（第一〇二話「瞽笑」）。○奔忙 [bēnmáng] = 齟齬として忙しい。忙しく走り回っている。氣忙しい。左訓「イソカハシ」（忙はし）。○清閑 [qīngxiān] = のんびりしていて、静かである。（心の中が）平安無事で、のどかである。「閒（閑）」は「ひまがある」意。和刻本は「閒」に作る。「閒（閑）」と「閒 [jiàn] [jiàn]」は、今も昔もしばしば混用されるが、本来は音も義も異なる。今、原刊本の表記に従い、正字「閒」に修正した。なお、『笑府』所収の類話も『笑林広記』と同様「清閑」に作る。○乃偽為官過 = そこで（農夫たちは、目の見えない二人には気づかれないように）役人が道を通り過ぎるふりをして、という意味。和刻本は、「為」に右傍訓「マネシ」（真似し）を附すが、極めて珍しい訓である。なお、『笑府』所収の類話は、「乃假為官人」（乃ち假に官人と為り）に作る。○鋤欄 [chú lán] = 鋤の柄。「欄 [bā]」は「器物」の取っ手の意。現代中国語では「把 [bǎ]」と表記される。左訓「スキノエ」（鋤の柄）。なお、和刻本も中国刊本も「木偏」が「手偏」の形になっているように見えるが、「木偏」と「手偏」に、書法上の区別はない。○各打一頓而呵之去 = （大勢の農夫たちが）それぞれ一発ずつ（鋤の柄で二人の盲人を）殴りつけ、大声で叱りつけて、その場を立ち去った、という意味。「頓 [dùn]」は、殴りつけた回数を数える助数詞（量詞）。和刻本の字形は、左側が「主」のような歪な形をしているが、これは中国刊本（京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二十六年（一七六一）宝仁堂刊本）に見える字形を忠実に再現しようとしたものである。その直後の「呵」字の形も、やや個性的な宝仁堂刊本の字形に酷似している。「呵 [hē]」は、「大声で叱りつける」意の動詞。○問罪 [wèn zuì] = 罪状を掲げ、公開の場で罪を明らかにし、厳しく裁きを下す、という意味。

補注

この話は、『笑府』巻十（第四四〇話「又（瞽）」）に類話がある。『笑府』所収話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同が認められるが、ほぼ同文である。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（下）』（岩波文庫、一九八三年二月、一〇八頁）を参照。

唐本『笑府』第四四〇話（明・泰昌元年（一六二〇）頃成立か、筑波大学中央図書館蔵本、巻十・形体部、四丁裏）

又（瞽）

二瞽者同行。曰世上惟瞽者最好。有眼人終日奔忙。

農家更甚。怎得如我們心上清閑。衆農夫竊聽之。乃

假為官人。謂其失于迴避。以鋤欄各打一頓。而呵之

去。隨後竊聽之。一瞽者曰。畢竟是瞽者好。若是有眼

人。打了還要問罪。

余説

本話は、「形体部」（人間の身体的特徴に関する部門）の第八話である。この話も、前話に引き続き、目の見えない人を揶揄したもの。世の中で盲人ほど気楽な稼業はないもんだ、眼の見える人は齟齬と忙しい毎日を送っている、しかしとりわけ百姓なんぞは最悪だな、やっぱり盲人が一番じゃ、などといった気になっていることを知った百姓どもが、生意気な盲人をぶちのめした、という話。しかも、ぶちのめされた後、懲りない盲人はこう言っている。

「それでもやっぱり盲人でよかった。眼の見える人だったら、ぶちのめされた挙げ句、さらに裁判所へ突き出され、弾劾されることにもなるだろうから。」

この話の「笑いのツボ」は、「ああ言えばこう言う」（慣用句）、または、イソップ童話に見える「隣の庭の葡萄は、きつと酸っぱいに違いない」（「すっぱい葡萄」）などと同様、周りがあきれかえるほどの「負け惜しみ」にあるのだろうが、この盲人の場合、それが単なる「負け惜しみ」ではなく、この程度の仕打ちで済んだのだから、眼の見える人でなくて、本当に良かったと、心の底から感じているようにも見受けられるところが、なおさら怖い（可笑しい）。

曰。何所見而笑。瞽者曰。你們所笑。定然不差。世人皆謂此瞽可笑。不知凡依樣画葫蘆。蹈襲舊時文套子。及隨人脚跟做事者。皆此瞽耳。

世人はみなこの盲人を可笑しいと思っている。だが実はみな似たり寄ったりで、お手本の通りに瓢箪を画き、古人の文章をそっくり真似し、人の尻にくつついて事をなす連中は、みなこの盲人と同じではないか。(松枝訳)

和刻本『刪笑府』(明和六年(一七六九)序、風来山人(平賀源内)施訓、大本、中野三敏先生旧蔵本、九丁裏)第三六話

瞽

一、瞽者與衆人坐。衆有所見而笑。瞽者亦笑。衆問之。曰。何所見而笑。瞽者曰。你們所笑。定然不差。オマヘガタノヲシガルニドウシテチガヒガアラフ

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第七話である。ここからしばらく、「目の見えない人」、または「目の悪い人」に関する話が続く。

本話は、周りの人たちが笑っているのを真似て、本当は何が可笑しいのか全く分かっていないくせに、周囲に合わせて作り笑顔を装っている盲人を嘲笑ったもの。

これだけでも素朴な面白さはあるだろうが、やはり『笑府』のコメントは振るっている。世の文人どもよ、古人の書画文筆を模範として文芸の道に日々精進しているのも、実は、この盲人の所作と同じである、と辛辣に言い放っているのである。『笑府』の編者であり、明末清初の中国における一代の鬼才であった馮夢龍(一五七四〜一六四六)の言葉である。深く味わうべきであろう。

⑩被^ひ打^だ(殴られる)

原文

被^レ打

二瞽者同行。曰。世上惟、瞽者最好。有眼人終日奔忙。農家更甚。怎

如^シ得^ン我^レ們^ヲ心上、清閑^{ナルニ}。衆農夫竊^ニ聽^ク之^ヲ。乃^ハ偽^ニ為^リ官^ノ過^ル、謂^フ其^ノ失^{スル}ヲ于^ニ迴避^ス。以^テ鋤^ヲ欄^ヲ各^々打^ツ一^ノ頓^ヲ而^レ呵^シ之^ヲ去^ル。随^テ復^ニ竊^ニ聽^ク之^ヲ。一瞽者曰^ク畢竟是^レ瞽^者好^シ。若^シ是有^ル眼人^{ナラハ}。打^ツ了^{シテ}還^タ要^{スル}問^フ罪^ヲ哩[。]

書き下し文

打^ツたる

二瞽者^ニ同^ニ行^ク。曰^ク。世上^ニ惟^ニ瞽^者最^モ好^シ。眼^有る人^ハは終^ニ日^ニ奔^ハ忙^ス。農家^ハ更^ニに甚^シ。怎^ンぞ我^レ們^ガ心上^ノの清閑^{ナルニ}なるに如^シき得^ン。衆農夫^ハ竊^ニ之^ヲを聴^ク。乃^チ偽^ニて官^ノの過^ルを爲^シ、其^ノの迴避^ニに失^スるを謂^フ。鋤^ヲ欄^ヲを以^テ各^々打^ツこ^ノと一頓^ニにして之^ヲを呵^シ。随^テ復^ニ竊^ニ之^ヲを聴^ク。一瞽者^曰く。畢竟^ニ是^レ瞽^者好^シ。若^シ是^レ眼^有る人^{ナラバ}。打^ツ了^{シテ}還^タ罪^ヲを問^フんと要^スる。

現代語訳

二人の盲人が、(次のようなおしやべりをしながら)連れ立って歩いていた。

「この世の中で、盲人ほどよいものはありませんな。だってのう、眼の見える人は、朝から晩まで齷齪と忙しく走り回っておるのじゃから。特に農家なんぞは、(その忙しさは)ひどいもんじやて。(それに比べたら)どうしてどうして、わしらほど、心穏やかで静かなもんはないじやろて。」

その話を盗み聞きしていた大勢の農夫たちは、役人になりすまして通りかかり、お前たちは通行の邪魔をして怪しからん、などという言いがかりをつけて、寄って集って鋤の柄で一発ずつ殴りつけ、大声で叱り飛ばして去って行った。

(農夫たちが)また後をつけて、こっそり二人の話をうかがっていると、(盲人の)一人が、こう言った。

「(さんざんな目に遭っとうたが、それでも)やっぱり盲人のほうに、まだマシじやろな。これがもしも眼の見える人だったら、殴られるだけでは相済まず、裁判沙汰になった挙げ句、さらに厳しく弾劾されることになっていたじやろから。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三二丁裏〜三三丁表)。『新鐫笑林広記』巻之

⑩ 瞽笑こしょう（目の見えない人が笑う）

瞽笑

書き下し文

瞽笑 こせう

現代語訳

「お前さんは、何を見て笑ったのかね。」

盲人は言つた。

注

補注

中国原本『笑府』および和刻本『刪笑府』^{えんしょうふ}の原文は、以下の通りである。『笑林広記』と対校すれば、僅かに文字の異同が見られる。

唐本『笑府』第四三九話（明・泰昌元年（一六二〇）頃成立か、卷十・形体部筑波大学中央図書館蔵本、四丁表～裏）

督

一瞽者與衆人坐。衆有所見而笑。瞽者亦笑。衆問之。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三二丁表裏)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第二四九話、九丁表)。○扇墜[shānzhuì] 〓 扇子の柄の先につける装飾品。組紐くみひものような物や、刺繍で編んだ物、玉や宝石などに彫刻をあしらった物などがある。和刻本は、本文中の「扇墜」に、左訓「センスノヲモリ」(扇子の鍾)を附す。○矮子[ěizi] 〓 ことごと。背丈の非常に低い人。多くは、小人症、侏儒症しゅじゆしやうの患者を指す。小人症(侏儒症)は、成長ホルモンの分泌不全が原因とされる。左訓「一寸バウシ」(一寸法師)。なお、「一寸法師」の歴史的仮名遣いは、正しくは「いつすんばふし」。ここでは原本の表記を保存しておく。○肉娘賊[càoniàngzéi] 〓 人を罵るときに最も下劣な語。「くそ」「こん畜生」などと訳されるが、それ以上に下劣なニュアンスをもつ卑猥な語。「肉[cǎo]」は「(女性を)犯す」意。「娘[niàng]」は「母親」「賊[zéi]」は「ろくでなし」の意。同義語に「我操[wǒcāo]」「他媽的[tā mādē]」「他娘的[tā niàngdē]」等がある。現代中国語と同じ。『笑府』所収の類話(第四五九話「矮(注)」)は「直娘賊[zhi niàng zéi]」に作る。「直」は「直」の異体字。「直」の用法については未詳だが、吳方言(蘇州語)では「肉[cǎo]」と通用する語であったのではないかと思われる。左訓「アホウメ」(阿呆め)。○若拿我做扇墜 〓 もしも俺を扇子の飾りにするのであれば、という意味。「拿[ná]」は、本来は「(手に)持つ」という意味の動詞だが、ここでは目的語を動詞の前に出すための前置詞(介詞)として用いられている。日本語の格助詞「を」に相当する。文法的な機能としては「把[bǎ]」「将[jiāng]」「以[yǐ]」と同じ。和刻本は、「拿」に右傍訓「モツテ」を附す。この訓は「拿」持つ(〓)の本義を生かしつつ、前置詞(介詞)「を」の意を含む「以(もつて)」の読みを宛てたものであろう。○我就凭心一脚踢殺你 〓 (お前が俺を扇子の飾りにするのであれば)俺は、お前の心臓めがけて一発蹴りをぶちかまし、蹴り殺してやる、という意味。「就[jiù]」は、通常「すなわち」と訓読し、「(もしも) …ならば」と、条件節を受ける副詞。和刻本には「二」という送り仮名が附されているため、仮に「ただちに」と訓んでおいたが、一般的な訓ではない。「凭」は「兜」の異体字。「兜[dōu]」は、「へ向かって」という意味の前置詞(介詞)。和刻本は「凭心」に左訓「ムネカラミ」(胸絡み)を附す。「ムネカラミ」は「(扇子からぶら下がっている飾りが) 胸のあたりに絡みついて」という意味であらう。

補注

この話は、『笑府』巻十(第四五九話「矮」注)に類話がある。『笑府』所収話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』と対校すれば、僅かに文字の異同がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一二五頁)を参照。

なお、『絶纒三笑』巻二時笑・外語一四二(第三三話「矮」)に『笑府』所収話「矮」と同名の笑話が収録されているが、『笑林広記』所収「扇墜」と内容は異なる。

唐本『笑府』第四五九話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、巻十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一二丁表裏)

矮

矮人乗舟出遊。因閣淺。自起撐之。失手墜水。々没遇頂。矮人起而怒曰。偏我閣淺。閣在深處。

有持大扇者。遇矮子。戲以扇置其頭。曰欲借兒作

扇墜耳。矮子大怒。罵曰。直娘賊。若拿我做扇墜時。

我就凭心踢你

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第六話である。これまでは、すべて「ヒゲ」という身体からだの部位 〓 「形体」にちなんだ話であったが、この話は、背丈の低い小人症こびじやうの男の「チビ」という身体的特徴を揶揄からかったもの。明清時代の中国にも江戸時代の日本にも、身体的マイノリティーを特別に保護しようとする思想がなかったため、今日的な視点から見れば、弱者に対する差別意識として非難されるべき話も多い。

本話は、通りすがりの男が背丈の低い「チビの男」の頭の上に大きな扇子を載せ、「こうすれば、まるでお前は扇子の飾りみたいだな」と揶揄からかったところ、「チビの男」が猛烈に怒り狂い、「このクソバカ野郎、俺を扇子の飾りにするなら、貴様の心臓めがけて一発蹴りをぶちかまし、蹴り殺したろうやんけ。」と、あまりにも口汚く怒鳴り散らす、という話である。

「笑いのツボ」は、「チビの男」の最後の口汚いセリフの言い回しにあるのであろうが、

唐本『笑府』第四三四話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、卷十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一丁裏―二丁表)

老面皮

衆聞論世間何物最硬。或言石。曰。石可碎也。或言金。曰。金可鑿也。最後一人指有鬚者曰。惟老兄鬚最硬。金石不如。問其何說。荅曰。你看這一副面皮裡面。虧他鑽了出來。

或以此嘲有鬚者。復之曰。足下面更老。這等硬鬚。還鑽不過。

余説

本話は「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第五話。和刻本『訳解笑林広記』「形体部」には五つの「ヒゲ」の話が収められているが、この第一〇〇話「老面皮」が、「ヒゲ」話の最後である。「ヒゲ」話の最後だけあって、なかなか出色の出来栄である。

「石よりも、銅鉄よりも硬い物、世界で一番硬い物は何でしょう。」と訊ねられ、「それはあなたのヒゲでしょう。」と答える。その意は、「その分厚い面の皮でさえ、あなたのヒゲはズボズボ突き破っているからです。」とのこと。

これだけでも十分よくできた噺だが、『笑林広記』には、さらに余談が加わっている。ヒゲの男は、それに対して次のように言い返す。「おっとどっこい。その手は桑名の焼き蛤。お前の面の皮の方が、もっともつと硬いだろうよ。このワシのヒゲでも、お前の面の皮だけは、まったく突き破ることができないのだから。」

要するに、この話は、相手の「面の皮の厚さ」(「厚かましき」)について、「ヒゲ」を出汁に、どちらが上手く相手を言い負かすことができるかという「悪口合戦」となっているのである。

『絶纓三笑』所収の類話には、堂々たる快男児を讃える成語「鬚髯如戟(鬚髯は戟の如し)」(『南史』褚彦回伝)を引き、昔から「ヒゲは戟のように硬い」という言い方もあるくらいだから、「世界で一番ヒゲが硬い」という主張にも、それはそれなりに一理ある、という編者のコメントが寄せられている。相変わらず、知的で魅力的な、

味わい深いコメントである。

なお、『笑林広記』所収話は、『絶纓三笑』『笑府』において、本話と注に分けて書かれた上記の内容を、一つにつなぎ合わせたものである。その証拠に、前半と後半のつなぎ目が、版面上に一字分の空白として残されている。そして、この版面上の特質は、中国刊本においても和刻本においても、同様に見られる。『笑林広記』の編者「遊戯主人」の編集作業の実態を垣間見ることのできる興味深い箇所である。

⑩扇墜(扇子の飾り物)

原文

扇墜

有持大扇者。遇矮子。戲以扇置其頭曰。欲借兄權作一扇墜。矮子大怒罵曰。尙娘賊。若拿我做扇墜、我就一坩心一脚踢殺了你。

書き下し文

扇墜

大扇を持つ者有り。矮子に遇ふ。戯に扇を以て其の頭に置いて曰く。兄を借て權に扇墜と作さんと欲するのみ。矮子大に怒り罵て曰く。尙娘賊。若し我を拿て扇墜と做さば、我就に坩心一脚に你を踢殺さん。

現代語訳

大きな扇子を持った人が、(背丈の低い)小人症の男にばったり出くわし、冗談半分に、扇子をその男の頭の上に載せて、こう言った。

「お。ちよつと貴兄を扇子のブラブラにしてみようと思ってね。ふふ。」

チビの男は、怒り狂って大声を上げた。

「このクソバカ野郎のストコドッコイ。もし俺を扇子のブラブラにしようものなら、俺は貴様の心臓めがけて一発蹴りをぶちかまし、蹴り殺してけつかる。」

相手に対する尊敬語(書面語)。日本語の「貴殿」「貴下」に相当する。また、普通「老」[lǎo]に「厚かましい」という意味はないが、ここは「厚顔無恥」「鉄面皮」という意味の中国語「老臉」[lǎo liǎn]「老臉皮」[lǎo liǎnpí]と言う場合の「老」[lǎo] (厚かましい) の意味で使用されている。和刻本は、「老」字に左訓「カタシ」(硬し) を附す。○這等硬鬚 [zhèděng yìng xū] = このように硬いヒゲ。「這等」[zhèděng] (このように、このような) は、現代中国語「这样」[zhèyàng]「这么」[zhème]と同じ。和刻本は、「這等」に左訓「コノヤウナ」、「硬鬚」に左訓「カタキヒゲ」(硬きヒゲ) を附す。○還鑽不透 [hái zuān bù tòu] = (これほどまでに硬いヒゲでも) まだ(穴を開けて) 突き破ることができない。「還」[hái] は、「〜ですら、まだなお」「さらに」という意味の副詞。現代中国語と同じ。「鑽不透」は、「動詞」[zuān] (穴を開ける) + 結果補語「透」[tòu] (突き抜けた状態を表す形容詞) の間に「不」が入った「結果補語の不可能形」(可能補語の否定形) とも言う。現代中国語と同じ。ここでは、石よりも鋼よりも硬いヒゲを以てしても、この人の分厚い面の皮は「突き破ることができない」という意味。

補注

この話は、『絶纓三笑』巻三時笑・影語六(第三六八話「厚面皮」)、『笑府』巻十(第四三四話「老面皮」)に類話がある。『絶纓三笑』及び『笑府』の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同がある。『絶纓三笑』には拙訳を添える。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一〇一〜一〇二頁)を参照。

唐本『絶纓三笑』第三六八話(明・万曆四四年(一六一六)序、巻三、時笑・

影語六、東京大学文学部蔵本、四丁表)

厚面皮

兩人相與語曰。天下何物最硬。曰鐵硬。曰。見火

就洋了。安得爲硬。然則何物。曰。莫如髭鬚。曰髭

鬚安得爲硬。曰。若干的厚面皮。被他鑽了出來

顔之厚矣。古云鬚髯如戟信然信然。○有無

鬚者。以此嘲多鬚者。多鬚者答曰。如此硬東西。還鑽你的面皮不破。亦自佳。

分厚い面の皮

二人の人が、次のように語り合っていた。

「世界中で、最も硬い物って、何でしょうな。」

「鉄じゃないかな。」

「鉄なんか」火にかけたら、すぐに溶けてドロドロになってしまふぞ。どうして最も硬いなんて言えましょうや。」

「それじゃあ、何が一番硬いでしょうな。」

「ヒゲとちゃうか。ヒゲより硬いものはないんとちゃうか。」

「なんでヒゲが硬いねん。」

「そこいらの分厚い面の皮たちが、ズブズブとヒゲに突き刺されて穴を開けておるからじゃ。」

(編者のコメント) 面の皮が分厚いということに関しては、古くから「鬚

髯如戟[xūrán rú jǐ]」(鬚髯は戟の如し)という言葉があるくらいだ

から、まことにその通りであろう。なるほどなるほど。(訳者注、『南

史』褚彦回伝に「君鬚髯如戟。何無丈夫意。」(あなたのヒゲは戟のよ

うに硬い(それほど立派な偉丈夫である)。どうして男らしい心根が

備わっていないわけがあらうか。(拙訳)とある。)○(また、次の

ような話もある。)ヒゲの生えていない男が、上に述べた話を持ち出

して、ヒゲの生えている男を揶揄ったところ、(今度は、ヒゲの生え

ている男に) 次のように言い返された。「このように硬いモノを以て

しても、それでもお前の面の皮は(あまりにも分厚すぎて)、やはり

突き破ることはできないのじゃ。」この話もまた、実によくできている。

このこの副の厚臉皮も、竟に他に鑽し出で来る。面皮は更に老なり。這等の硬鬚も、還鑽し透さず。

有鬚者 回嘲して曰く。足下の

現代語訳

ある人が訊ねた。

「世界中で最も硬い物って、何でしょうな。」

「石と鋼でしょうか。」

その人は言った。

「石は砕くことができるし、鋼は（鑿で）彫ることができるのだから、硬いなんて言えないでしょうよ。（そんなものより）私の見るところ、貴兄の顔に生えているそのヒゲこそが、最も硬いのではないのでしょうか。鉄や石など、とてもじゃないが、どのみち（貴兄のヒゲには）及びませんよ。」

それは一体どういうことかと、その理由を訊ねたところ、男は答えた。

「あのですね。ほれ、その貴兄の分厚い分厚い面の皮、その面の皮までも、貴兄のヒゲはズボッと突き破って、外に飛び出しているのですから。」

すると、ヒゲを蓄えた男は、こう言い返した。

「いやいや。貴兄の面の皮の方が、もっとも分厚いでしょうよ。このワシの（世界で一番硬いヒゲも（おぬしの面の皮だけは）やはり突き破ることができないのじやから。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部（三二丁表）。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部（第二四二話、七丁表裏）。○老面皮 [lǎo miànpí] ≡ 分厚い面の皮。鉄面皮。厚かましくふてぶてしいことを言う。「老 [lǎo]」は「老臉 [lǎo liǎn]」「老臉皮 [lǎo liǎnpí]」の「老 [lǎo]」（厚かまし、分厚い）という意味になる。後出「足下の面皮更老」の注も参照。○石頭 [shítou] ≡ 石。この場合の「頭」は単なる接尾辞であり、「頭（あたま）」という意味ではない。現代中国語と同じ。なお、日本語の「石頭」は、中国語では「頑固的脑袋 [wángù de nǎodai]」「硬脑袋 [yìng nǎodai]」（融通の利かない人間）など

と表現する。左訓「イシ」（石）。○鋼鉄 [gāngtiě] ≡ 鋼鉄。鋼。硬く鍛えられた鉄のこと。左訓「キタヘカネ」（鍛へ鉄）。○石ハ可レ砕ケ ≡ 石は（可能性として）砕けることがあり得る。和刻本の訓点に従えば、「石は砕けべく」となる。「砕く」は下二段活用動詞であり、普通は「砕くべく」と読む。一般的に、助動詞「べし」は、動詞・助動詞の終止形に接続し、ラ変型活用動詞の語には、その連体形に接続する。しかし、上代には、上二段活用動詞の連用形を承け、室町時代には、下二段活用動詞の連用形を承けた例がある。ここは、和刻本の訓点（活用語の語尾としては古い形）に従い、「石は砕けべく」と読んでおく。○鉄可鑿 [tiě kě zàn] ≡ 鉄は（鑿や鑿で文字や図柄を）彫り込むことができる。和刻本は、「鑿」字に左訓「キレル」（切れる）を附す。なお、『笑府』所収の類話は、「金可鑿也」（金属には鑿で穴を開けることができる。）に作る。「鑿 [zàn]」と「鑿 [zào]」は、意味の近い類語だが、字形も字音も異なる。○髭鬚 [zixu] ≡ （口の周りに生える）ヒゲ。「鬚」は「鬚」の異体字。厳密には、「髭」は「口ひげ」、「鬚」は「あごひげ」を指すが、「髭鬚」は「ひげ」の総称として用いられる。現代中国語では「胡子 [húzi]」と言う。左訓「ヒゲ」。○搥是 [zòngshì] ≡ 結局つまり。どのみち。「搥」は「搥」の異体字。現代中国語「总是 [zòngshì]」と同じ。前出（第九七話「一般鬚」）。中国原本（京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二六年（一七六一）宝仁堂刊本）は「是」字を欠くが、「搥是」と「搥」に意味上の違いはない。○這副厚臉皮 ≡ この分厚い面の皮。「副 [fù]」は、顔の表情を表すときに用いられる助数詞（量詞）。数量が「一」のとき、しばしば数詞「一」は省略される。現代中国語と同じ。したがって、直訳すれば「この一つの分厚い顔の皮」となる。左訓「ヒトツノアツキツラノカハ」（二つの厚き面の皮）。左訓に見える「ヒトツノ」は、原文に見える助数詞（量詞）「副」を忠実に翻訳したものである。○竟 [jìng] ≡ 意外にもあるうことか。予想外の事態に直面したときの気持ちを表す副詞。前出（第九九話「黄鬚」）。和刻本には送り仮名が抜けているが、通常「竟に」と読む。○鑽了出来 [zuān le chūlai] ≡ （錐で穴を開けるように、中から）穴をこじ開けて、外に突き出している。「鑽 [zuān]」は、「（錐などで）穴を開ける」意の動詞。「出来 [chūlai]」は、動詞の後に置かれ、その動作の結果、中から外方向に物が出てくるニュアンスを強める方向補語。現代中国語と同じ。左訓「ツキヌカル、」（突き抜かるる）。○足下の面皮更老 ≡ おぬしの面の皮は、もっと厚かましくできておる。「足下 [zúxià]」は、話し

として、そのまま掲載されている。

『解顔新話』および『即当笑合』の原文を、京都大学附属図書館蔵本によって示す。

和刻本『解顔新話』第三八話「黄鬚」(寛政六年(一七九四)序、京都大学附属図書館蔵本、下巻、一二丁裏)

黄鬚

一人鬚黄 毎誇^テ自妻^ニ曰^ク 黄鬚無^ニ弱^ニ漢^一 一生
不^レ受^ニ三人欺^一 一日出^テ外^ニ 被^レ毆^テ而^レ帰^ル 妻^ニ引^テ前^ニ言^フ
笑^フ之^ヲ 荅^テ曰^ク 那^レ曉^一得^ル 那人^一的^ニ鬚^ニ 是^レ通^ニ紅^ニ的^一
鬚^ニの黄^ニな漢^ニが有^テ 毎^ニに妻^ニに誇^シして 黄^ニ鬚^ニに
弱^ニひものはない 一生 人に欺^バにされぬと 一日外へ出^テ
毆^レれて帰^ル 妻^ニ 前^ニ言^ヲを引^テて笑^フ 夫^ノ曰^ク 那^レで
曉^リ得^タした 那人^一的^ニの鬚^ニは 通^ニ紅^ニであつた

和刻本『即当笑合』第七四話「黄鬚」(寛政八年(一七九六)序、京都大学附属図書館蔵本、巻四、一二丁表)

黄鬚

鬚^ニの黄^ニな漢^ニが有^テ 毎^ニに妻^ニに誇^シして 黄^ニ鬚^ニに
弱^ニひものはない 一生 人に欺^バにされぬと 一日外へ出^テ
毆^レれて帰^ル 妻^ニ 前^ニ言^ヲを引^テて笑^フ 夫^ノ曰^ク 那^レで
曉^リ得^タした 那人^一的^ニの鬚^ニは 通^ニ紅^ニであつた

『解顔新話』には、原文の文字を誤写しているほか(原本「毎于妻前自誇」を「毎誇自妻」とし、原本「毆」(なぐる)を「毆」とする)、その日本語訳には、語法的な誤りを含む箇所がある(原文「那曉得」(どうして分かるだろうか)を「那で曉得した」と誤訳している)。

なお、『解顔新話』については、拙稿「『解顔新話』全注釈」(平成二十一年度、平成二十三年度 科学研究費補助金 成果報告書「中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究」課題番号二一五二〇二二五、一〇七、一〇八頁)に詳しい。

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第四話。またしても「ヒゲ」の話の続きである。

自分の黄色いヒゲを、いつも妻に自慢していた男が、「通紅的[tōnghóng de]」(そのヒゲが、辺^{あた}り一面、真っ赤つとも言えるほどに) 赤いヒゲの男に毆^うられた、という内容である。「いくら黄色いヒゲでも、赤ヒゲには敵^かわない」などという、夫の言い草の面白さに「笑いのツボ」があるのではあろう。

和刻本の施訓者である遠山荷^{とやまのかとう}塘^{たう}は、文末割注によって、「一般的に、赤色が尊重されるのが世の常だから、面白味があるのだ(凡貴^{ふんき}紅^{こう}為^な上^{じやう}色^{しき} 其^{その}常^{じやう}也^や 故^ゆ有^あ趣^き味^み)」と、この話の「笑いのツボ」を説明しているが、この説明も、やや理解に苦しむような気がするの、私だけであろうか。むしろ、個人的には、誰かに毆^うられて外から帰ってきた夫を、妻がバカにして嘲笑^{あざわら}っている、この清朝時代の中国における歪^{いびつ}な夫婦関係にこそ、面白味を感じる。その点を誇張して描写しているのが、微妙に表現を変えて類話を採録した『笑林評』(補注参照)なのではなかろうか。併せて味読されたい。

⑩ 老面皮 (分厚い面の皮)

原文

老面皮

或問^フ世^ニ間^ニ何^ニ物^ニ最^モ硬^キ 曰^ク 石^一頭^ニ與^ニ銅^ニ鉄^一。其^{その}人^{ひと}曰^ク 石^ハ可^レ碎^ス。鉄^ハ可^レ鑿^ス。
安^ん得^レ爲^レ硬^ト 硬^ト。以^レ弟^ニヲ^シ看^ミ来^レハ、惟^い、兄^ニノ面^{おもて}上^{じやう}ノ鬚^{ひげ}最^モ硬^シ。鉄^一石^一搥^キ是^レ不^レ如^キ也^や。
問^フ其^{その}故^{ゆゑ}、荅^テ曰^ク。看^ミ老^{らう}兄^{こう}、這^{こゝ}ノ副^{へい}厚^{こう}臉^{けん}皮^ひモ、竟^い被^レ他^た二^に鑽^く了^し出^デ来^ラ。有^あ鬚^{ひげ}者^{もの}
回^{くわい}嘲^{てう}曰^ク。足^{あし}下^{した}ノ面^{おもて}皮^ひ、更^{さら}老^{らう}也^や。這^{こゝ}ノ等^{とう}硬^{こう}鬚^{ひげ}モ、還^{また}鑽^く不^レ透^と。

書き下し文

老面皮

或^{ある}ひと問^とふ世^よ間^{かん}何^{なん}物^{ぶつ}最^も硬^{かた}き。曰^{いは}く。石^{せき}頭^{とう}と銅^{かう}鉄^{てつ}と。其^{その}人^{ひと}曰^{いは}く。石^{いし}は碎^{くだ}け
べく。鉄^{てつ}は鑿^くすべし。安^{あん}ぞ硬^{かた}しと為^なすことを得^えん。弟^{てい}を以^{もつ}て看^み来^{きた}れば、惟^{ただ}兄^{けい}の面^{めん}
上^{じやう}の鬚^{しゆ}最^も硬^{かた}し。鉄^{てつ}石^{せき}は搥^すて是^{これ}如^{ごと}かず。其^{その}故^{ゆゑ}を問^とふ、荅^{こた}て曰^{いは}く。看^みよ老^{らう}兄^{こう}

良人心性。見説要他當面見生人。耳根通紅起來。揺手道。」(狄氏は心根のやさしい人であつたから、自分が見知らぬ女性と直接顔を合わせてしまうかもしれないと聞いて、耳の付け根まですっかり真っ赤になつてしまつた。そして手を振つて言つた。(拙訳)とある(原文の引用は、東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫蔵、消閑居刊本(五丁表)に拠る)。左訓「マツカナ」(真つ赤な)。○「凡貴紅為上赤其常也故有趣味」(割注) 赤を高貴な色として尊重するのが世の常だから、面白味があるのである、という意味。この割注は、和刻本の施訓者、遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。

補注

この話は、中国原本『笑林評』第七〇四話(『統笑林評』内題)、笑林評 下(外題)、『笑府』卷十(第四五五話「黄鬚」)に類話がある。『笑林評』及び『笑府』所収話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、『笑府』と『笑林広記』については、僅かに文字の異同はあるが、内容は同一である。『笑林評』所収話については、基本的には同じ話と言えようが、夫の鬚の色が「黄」ではなく「赤」となっている点、また、夫に対する妻の敵意と嫌悪感が、なぜか余りにも露骨に描き出されている点が異なる。

『笑林評』には拙訳を附す。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一二〇頁)を参照。

唐本『笑林評』第七〇四話(『統笑林評』第二三二話、万曆三十九年(一一六一)序、内題「統笑林評」、外題「笑林評 下」、国立公文書館(内閣文庫)蔵本、七六丁表裏)
一赤鬚人。為妻所厭。忽謂妻曰。凡鬚赤者厮打無賽。我自可不招人欺。汝何得相輕慢耶。一日出外被毆。狼狽而歸。妻嘲之曰。前言猶在。竟飽老拳。汝鬚豈不赤耶。夫慌答云。爭奈他鬚是通紅的。虬髯也讓髭聖。這人莫便誇口。

ある赤ヒゲの男、妻に嫌われていた。男は突然、妻に向かって言つた。

「赤ヒゲの男は、ケンカをしても負けないんだぞ。オレ様は、誰にもバカにされたりしないんだぞ。それなのに、お前は何だつてオレ様をバカにしやがるんだ。」

ある日のこと。男は、遠くへ出かけた際、誰かにぶん殴られて、這這の体で帰つて来た。妻は、せせら笑つて言つた。

「あれれ。あんた前に何て言つたあ。おつとどっこい、こりゃ拳骨食らつてなさるんじゃないですかあ。あれれ。あんたのヒゲは、赤いんじゃないのかしら。」

夫は、どきまぎしながら答えた。

「これは、仕方がなかつたのだよ。だつて、あいつのヒゲは、(ただ赤いだけでなく) 真つ赤つか、だつたのじゃから。」

(編者のコメント)「虬髯」(隋末の人、「縮れた鬚ヒゲ」を蓄えていたことからの命名)という男も、「髭聖」(「唐の太宗」の綽名、「もじやもじやの口髭を生やした高貴な人」という意味)には頭が上がりなかつた。この男も、もはや(「赤ヒゲの男はケンカに負けない」などと)デカい口を叩くことはできないであらう。

【訳者注】「虬髯」という人物は、唐代に武装蜂起した叛徒である。唐の太宗と遭遇し、相手が本物の皇帝であることを知り、ビビって退散したという話が伝わっている。唐代の伝奇小説『虬髯客伝』に詳しい。

唐本『笑府』第四五五話(明・泰昌元年(一一六二〇)頃成立か、卷十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一〇丁裏)

黄鬚
一人鬚黄。每于妻前自誇黄鬚無弱漢。一生不受人欺。一日出外。被毆而歸。妻述前語笑之。荅曰。他的鬚是通紅的。

また、この話は、和刻本『解顔新話』(寛政六年(一七九四)序)にも収録され、小咄本『即当笑合』(寛政八年(一七九六)序)に、その日本語訳が「江戸小咄」

この話は、「オチ」の一言にすべてが集約される「一発ギャグ」と言ってよい。「まばらヒゲ」の男が人相を見てもらうと、「大金持ちでもなく、食うに困るほどでもない」との見立て。その故や如何と問うに、「上より少なく、下より多い（比上不足。比下有餘）」、意識すれば「そなたのヒゲは」上のヒゲにしては毛が足りないし、下のヒゲにしては毛深すぎる」からである、とのこと。

この話は、必ずしも下ネタとして理解する必要はないように思われるが、「まばらなヒゲの生え方（をした顔の人相）」が、福相でもなく貧相でもなく、どっちつかずだ」というだけでは、笑話として、やや落ち着きが悪い（＝「オチ」の付き方が不十分である、パンチが弱い）のではなからうか。

99 黄鬚 (黄色いヒゲ)

原文

黄鬚

一人鬚黄也。毎于妻前自誇。黄鬚無弱漢。一生不受二人欺。一日出外、被毆而歸。妻引前言笑之。荅曰。那曉得。那人的鬚。竟是通紅的。凡貴紅為上。色其常也。故有趣味。

書き下し文

黄鬚

一人鬚黄なり。毎に妻の前にて自ら誇る。黄鬚に弱漢無し。一生人の欺きを受けず。一日外に出づ、毆ぜられて帰る。妻前言を引て之を笑ふ。荅て曰く。那ぞ曉得せん。那の人の鬚は。竟に是通紅なり。凡そ紅を貴て上色と為す、其の常なり、故に趣味有り。

現代語訳

ある一人の男、ヒゲが黄色かった。そして、「黄色いヒゲの男に軟弱な奴はいない。だから、死ぬまで他人にバカにされることもないじゃろう。」と、いつも妻に自慢していた。

ところが、ある日、出かけた先で、ぶん殴られて帰ってきた。妻は、夫がいつも言っていた言葉を引き合いに出して、カラカラと笑った。夫は言った。

「黄色いヒゲがスゴイというのは変わらんのじゃが、ワシをぶん殴った」あいつのヒゲは、あろうことか、（黄色よりもっとスゴイ色で、一本残らず）真っ赤つかったのじゃよ（さすがの黄色も、赤には到底敵わんわ）。」

【和刻本割注】赤を高貴な色として尊重するのが世の常である。この話の面白味は、そこにある。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部（三三丁表）。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部（第二四一話、七丁表）。○黄鬚無弱漢＝黄色いヒゲの男に軟弱な奴はいない。『鬚』は『鬚』の異体字。左訓「キイロノヒゲニヨハムシナシ」（黄色のヒゲに弱虫なし）。○一生不受人欺＝一生、人にいじめられることはない。現代中国語でも、「（人）をいじめる」ことを「欺負[qīfu]」、「いじめられる」ことを「受欺負[shòu qīfu]」と言う。この文脈では、日本語の訓読「あざむく（欺）」とは意味が異なる点に注意。○被毆而歸[bei'ou'er gui]＝殴られて帰って来た。和刻本は、「毆」字を「歐」に作る。「歐[ōu]」と「歐[ōu]」は音通。「漢書」張良伝に「良愕然。欲歐之。」という用例があり、顔師古の注に「歐、撃也」とある。したがって、必ずしも「歐」は「毆」の誤写であるとは言いが切れないが、原義に反する用法である。今、中国原本の表記に従い、本文の文字を改めた。「また、和刻本は「被歐」に左訓「ウチフマレテ」（打ち踏まれて）を附す。○那曉得[nà xiǎode]＝どうして分かるだろうか。「那」字は、去声（第四声[nà]）で発音されるときは「あの」「その」という意味の指示詞になるが、上声（第三声[nǎ]）で発音されるときは、「どの」「どうして」という意味の疑問詞になる。後者の意味の場合、現代中国語では「哪」と表記される。和刻本は、「那」字の左上に○印を附し、この文字の発音が、去声（第四声）ではなく上声（第三声）であることを明示している。左訓「オモヒカケナイ」（思ひがけない）。○竟[jīng]＝意外にも。あろうことか。予想外の事態に直面したときの気持ちを表す副詞。○通紅[tōnghóng]＝（ある一定の面積全体が、すっかり）真っ赤である。『初刻拍案驚奇』巻六に「狄氏は个

で発音されると「互いに」の意となるか、動詞の接頭辞としての用法となる。○尊相 [zūn xiāng] 〓 あなたの人相。「尊」は、聞き手に対する尊称。和刻本は、この「相」にも、去声（第四声 [xiāng]）であることを示す声点符号を附している。○雖レモ不レ大富マ。〓和刻本の訓点に従えば「大に富まざれ雖も」となるが、今一般的な訓読に従い、「大に富まずと雖も」と訓んでおく。○相士曰。看公之鬚。〓「あなたのおヒゲを拝見いたしますに…」と人相見は言った、という意味。和刻本は、「相士云。看レハ公之鬚。」に作る。今、中国原本（京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二十六年（一七六〇）宝仁堂刊本）に拠り、「云」を「曰」に、「鬚」を「鬚」に改めた。厳密には、「鬚[hū]」は「口ひげ」、「鬚[xū]」は「あごひげ」を表すが、一般的に、「口の周りに生えたヒゲ」を「鬚[hū]」と言う。○比上不足。比下有餘。〓上のヒゲと比べれば足りないし、下のヒゲと比べてみればたっぷりある。具体的に、どのヒゲをどのヒゲと見比べているのかは分かりにくい、やや下ネタの気味が感じられる。第九七話「一般鬚」の注に述べた通り、「上のヒゲ」は「口ひげ」、「下のヒゲ」は「陰毛」を指す、という解釈も十分に成り立つが、遠山荷塘による和刻本は、そのことを明記しない。また、前話の補注に示した通り、『絶櫻三笑』の編者は、「下のヒゲ（下鬚）」に対して、かなり踏み込んだコメントを残している（第六七三話「使乎使乎」評）。左訓「ドツチツカズダ」。

補注

この話は、中国原本『笑林評』第二二六話（「笑林評上（内題）、笑林評上（外題）」）に類話がある。『笑林評』の原文は、以下の通りである。『笑林広記』と対校すれば、文字レベルでの微小な差異は認められるが、基本的に同一の内容であると言える。拙訳を添える。

唐本『笑林評』第二二六話（万曆三十九年（一六一一）序、内題「笑林評上」、外題「笑林評上」、国立公文書館（内閣文庫）蔵本、四七丁表）

一人鬚鬚疎秀。相者曰。論公家事。雖不大富。亦不極

貧。鬚者曰。如何見得。相士云。看公之鬚、將上不足。比、下有餘。

這是達磨相 不是麻衣相。

ある男、まばらなヒゲを生やしていた。人相見は言った。

「ふむふむ。家庭のことにつきましては、あなた様は、大富豪にはなれませんが、ド貧民になるわけでもございません。」

ヒゲの男は言った。

「どうして、そのように見立てなさる。」

人相見は言った。

「あなた様のおヒゲを拝見いたしますに、上のヒゲにしては毛が足りず、下のヒゲにしては少し毛深いからでございます。」

（編者のコメント）これは達磨（禪宗の始祖、六世紀の人）の顔であり、観相術で有名な麻衣道者（宋代の人）の顔ではない。

また、明治十九年（一八八六年）に「版權免許」を受けた『開卷百笑』（蘭厓逸史（岩本吾一）纂譯、金櫻堂梓）に、『笑林広記』所収話の日本語訳が掲載されているので、ここに紹介しておく。

明治刊本『開卷百笑』（蘭厓逸史（岩本吾一）纂訳、明治十九年（一八八六）版權免許）

第八九話（架蔵本、五二―五三頁）

相士

一稀鬚子 相ヲ要ム 而シテ相士云フ 尊相 大富ナラズト雖トモ亦
貧ニ至ラズト 子曰ク 何ヲ以テ見得タル 相士ノ曰ク 公ノ鬚ヲ看
ルニ 上ニ比スレハ足ラズ 下ニ比スレハ餘リアリ
評 若シ智ニ比スレハ何如

余説

本話は、「形体部」（人間の身体的特徴に関する部門）の第三話。前二話に続き、やはり「ヒゲ」の話である。

鬚二一般的

余説

本話は、「形体部」(人間の身体的特徴に関する部門)の第二話である。前話に引き続き、「ヒゲ」に関する話だが、その内容は『論語』の枉解物(こじつけの解釈)となっている。さて、『論語』の文章に出てくる「乎[hū]」という助字(疑問の気持ちを表し、日本語の終助詞「か」「や」に相当する)を、近似音の「髭[hī]」(ヒゲ)という意味に誤読してしまうことは、実際に、庶民レベルでは、ごく身近にあったであろうと思われる。儒学が学問・道德の基礎と位置づけられていた時代にあつて、初等教育で使用する基礎的な教科書の文章を曲解(誤読)することは、「四書五経」の勉強に明け暮れていた科挙受験生たちに、殊の外喜ばれたであろうことは、想像するに難くない。この話は、『論語』本文の意味を同音異義語を用いてねじ曲げ、『論語』の解釈としては到底あり得ない荒唐無稽な読みを示すことによつて、あたかも「欽ドン! よい子、悪い子、普通の子」とでも言っているかのようなリズムで、「よいヒゲ」「悪いヒゲ」「普通のヒゲ」などと、ヒゲを分類してみせたところに「笑いのツボ」があると言えよう。

そしてさらに、「下のヒゲ」という言い方が、強烈に淫靡(いんぴ)な香りを放っているところは、現代中国語でも現代日本語でも、実は全く同じである。そのような言葉が、登場人物の口からポロリと漏れただけで、下ネタ好きの読者は敏感に反応したであろうことも、言い添えておかねばなるまい。

98 稀鬚子(まばらなヒゲ)

原文

稀鬚子

一ノ稀鬚子要相(マバラヒゲ)。相士云ク。尊相(マバラヒゲ)雖(レ)不(レ)大(レ)富(マ)。亦(レ)不(レ)至(レ)貧(マ)。鬚者云ク。何以(マ)見(レ)得(マ)。相士曰(マ)。看(レ)公(マ)之(マ)鬚(マ)。比(レ)上(マ)不(レ)足(マ)。比(レ)下(マ)有(レ)餘(マ)。

書き下し文

稀鬚子

一の稀鬚子 面を相せんと要す。相士云く。尊相は大に富まずと雖も。亦貧に至らず。鬚者云く。何を以て見得たる。相士曰く。公の鬚を看れば。上に比するに足らず。下に比するに餘り有り。

現代語訳

まばらなヒゲを生やした一人の男が、占い師に人相を見てもらった。人相見は言った。

「お客さんのお顔は、大金持ちになるほどの福相ではございませんが、かと言って、お金に困るほどの貧相でもございません。」

ヒゲの男は言った。

「どうして、そうにお見立てなさる。」

人相見は言った。

「あなた様のおヒゲを拝見いたしますに、上のヒゲにしては毛が足りず、下のヒゲにしては少し毛深いからでございます。」

【訳者注】易者にとつて、大金持ちになる「福相」というものは、たつぷりヒゲを蓄えた、仙人のような面立ちを言うのであろう。和刻本には「ドツツツ カズダ」という左訓が施されている。また、「下のヒゲ」という言い方が、やや下がかったニュアンスを含むことは、第九七話「一般鬚」の場合と同じである。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三二丁裏)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第二三〇話、四丁裏)。○稀鬚子[xī hūzǐ] 〓まばらで薄いヒゲ。左訓「マバラヒゲ」。○相面[xiāng miàn] 〓人相を見る。和刻本は、「相」字の右上に去声(第四声[xiàng])の声点符号を附す。「相」字は、去声(第四声[xiàng])で発音されると「(人相を)見る」すがた「形」[ありさま]の意となり、平声(第一声[xiāng])

(先生は、答えて) 言った。
「はい、あります。一つは聖人の『乎[hū]』であり、もう一つは賢人の『乎[hū]』です。」

(教え子は) また質問した。

「『論語』先進篇の一節」『君子者か(君子者乎)』『色莊者か(色莊者乎)』という二つの『乎[hū]』の字には、違いがあるのでしょうか。」

「はい、あります。一つは、誠実な人の『乎[hū]』であり、もう一つは、うわべを取り繕うだけの偽善者の『乎[hū]』です。」

(教え子は) さらに質問した。

「『論語』憲問篇の一節」『使いなるかな、使いなるかな(使乎使乎)』という二つの『乎[hū]』の字には、違いがあるのでしょうか。」

「いいえ、違いはありません。上の『乎[hū]』(＝ヒゲ(『鬚[hū]』))は、下の『乎[hū]』(＝ヒゲ(『鬚[hū]』))と同じです。」

【訳者注】『絶纓三笑』の本文は、この最後の箇所のみ、『乎[hū]』＝『鬚[hū]』(ヒゲ)という割注が施されている。したがって、前半の問答は、すべて「乎」という文字の語法的な説明に終始するものであり、最後の一句のみ、「乎」＝「鬚(ヒゲ)」のダジャレとして理解することを、編者は想定している。ただし、この話に登場する先生自身は、あくまでも『論語』本文の語法的な説明を施しているつもりであって、読み手がそれをダジャレとして「ヒゲ」の意味に曲解して楽しむ、という趣向である。なお、このダジャレは、下ネタの臭いがする。つまり、「上のヒゲ」は「口ひげ」を指し、「下のヒゲ」は「陰毛」を指すとも考えられる。

(編者のコメント) 一説に曰く。ヒゲ面の人を揶揄った、次のような話もある。
『論語』という書物は、すべて「ヒゲ面の人(鬚子)」のことを言ったものである。(『論語』学而篇の一節)「亦説(まこと)はしからずや(不亦説乎)」「亦樂(またた)しからずや(不亦樂乎)」「亦君子(またん)ならずや(不亦君子乎)」「という、この三つの「乎[hū]」(＝ヒゲ(『鬚[hū]』))は、よいヒゲであり、(同じく『論語』学而篇の一節)「人の為(ため)に謀(ま)りて忠(ちゅう)ならざるか

(爲人謀而不忠乎。」「朋友と交わりて信ならざるか(與朋友交而不信乎。」「習(な)わざるを伝(つた)うるか(傳不習乎。))という、この三つの「乎[hū]」(＝ヒゲ(『鬚[hū]』))は、悪いヒゲであり、(『論語』先進篇の一節)「君子者か(君子者乎。」「色莊者か(色莊者乎。))という、この二つの「乎[hū]」(＝ヒゲ(『鬚[hū]』))は、一つはよいヒゲ、一つは悪いヒゲである。すると、ある人が、こう質問した。「それでは、(『論語』憲問篇の一節)『使いなるかな、使いなるかな(使乎使乎)』(という、この二つの「乎[hū]」(＝ヒゲ(『鬚[hū]'))については、どのように説明しますか。」「答えて言う。「上のヒゲは、下のヒゲと、同じです。(訳者注:「上のヒゲと、下のヒゲは、(『よいヒゲ』『悪いヒゲ』)に対して)普通のヒゲです」という意味にもなる。」「そもそも「乎」というものは(文法的に、文章の下の方に置かれる助字であるから、「ヒゲ(鬚)」と比較する場合、「下のヒゲ(陰毛)」と比べてみて(はじめてその比較が)極まるというものである。(それを「上のヒゲ(口ひげ)」と比較するとは)言いがかりも甚だしいかなヒゲ(冤哉乎也。))、と言うべきである。

なお、本話は、和刻本『笑府』(明和五年(一七六八) 京都刊、半紙本) 第八二話(下巻、二丁裏～三丁表)に収録されており、その原文は、以下の通りである。引用は、京都大学附属図書館蔵本に拠るが、「嘶本大系」第二十卷(武藤慎夫編、東京堂出版、一九七九年、二二八頁)にも影印が備わる。

和刻本『笑府』(明和五年(一七六八) 京都刊、半紙本、京都大学附属図書館蔵本、

巻上、一八丁表裏) 第九七話

有嘲(二)鬚子者(一)上曰(二)論語(一)書皆講(二)鬚子也(一)不亦説(カラ)乎(ヒゲ)不(二)亦君子(ナラ)乎(ヒゲ)這(二)三ツノ(一)箇乎(ヒゲ)是好(キ)鬚(ヒゲ)為(レ)人謀(メ)而不(レ)忠(ヒゲ)乎(ヒゲ)與(二)朋友(ナラ)交(ヒゲ)而不(レ)信(ナラ)乎(ヒゲ)傳(二)不(レ)習(ナラ)乎(ヒゲ)這(二)三ツノ(一)箇乎(ヒゲ)是(二)不好(ナラ)鬚(ヒゲ)君子(ナラ)者(ヒゲ)乎(ヒゲ)色莊(ナラ)者(ヒゲ)乎(ヒゲ)這(二)兩ツノ(一)箇乎(ヒゲ)一好(ハ)一不(ハ)好(ハ)或問(フ)使乎使乎 如何講(スル)曰(二)上(一)面ノ鬚(ヒゲ)與(二)下(一)面ノ

唐本『笑府』第四五二話（明・泰昌元年（一六二〇）頃成立か、卷十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、八丁裏）

一般鬚

有嘲鬚子者曰。論語一書皆講鬚子也。不亦悅乎。不亦樂乎。不亦君子乎。這三箇乎。是好鬚。為人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。這三箇乎。是不好鬚。君子者乎。色莊者乎。這兩箇乎。一好一不好。或問使乎使乎如何講。曰。上面的鬚。與下面的鬚。一般的。

唐本『絶纓三笑』第六七三話（明・万曆四四年（一六一六）序、卷四・儒笑

七九、東京大学文学部蔵本、四六丁裏（四八丁裏）

使乎使乎

嘲鬚鬚者曰。一學徒問其師曰。學而時習三乎字。與吾日三省三乎字。有分別否。曰。有分別。一是聖人之乎。一是賢人之乎。又問君子者乎。色莊者乎。二乎字有分別否。曰。有分別。一是誠者之乎。一是偽者之乎。又問使乎使乎二乎字有分別否。曰。無分別。上邊鬚「乎」便是下邊鬚「乎」

一云有嘲鬚子者曰。論語一書。皆說鬚子也。

不亦說乎。不亦樂乎。不亦君子乎。這三箇乎。

是好鬚。為人謀而不忠乎。與朋友交而不信

乎。傳不習乎。這三箇乎。是不好鬚。君子者乎。

色莊者乎。這兩個乎。一好一不好。或問使乎

使乎。如何說。曰。上面的鬚。與下面的鬚。一般

的。凡乎皆以比鬚。至比之下鬚。極矣。冤哉乎。

也。○鬚子評林曰。鬚子一。我未上頭你先出。

天下莫蚤。於一鬚子。評云。時哉時哉。鬚子二。

遇考童生。就要剃。天下莫詐。於二鬚子。評云。

吾。如。有。萌。焉。何。哉。鬚子三。烏鬚染藥滿腮攤。

天下莫穢。於三鬚子。評云。爾焉能浼我哉。鬚

子四。打了辮子無意思。天下莫勞。於四鬚子。

評云。予豈好辨哉。鬚子五。風吹倒捲如老虎。

天下莫猛。於五鬚子。評云。彼惡敢當我哉。鬚

子六。朝朝夜夜防火燭。天下莫險。於六鬚子。

評云。岌岌乎殆哉。鬚子七。躲了疔蚤尋不出。

天下莫癢。於七鬚子。評云。此物奚宜至哉。鬚

子八。白者難容須要拔。天下莫痛。於八鬚子。

評云。豈愛身不若桐梓哉。鬚子九。要喫東西

難到口。天下莫急。於九鬚子。評云。仁「唇」遠乎。

哉。鬚子十。睡時放頓難擺畫。天下莫苦。於十

鬚子。評云。君如彼何哉。鬚子十一。陰陽二毛

稱先識。天下莫尊。於十一鬚子。評云。惡得有

其一以慢其二哉。鬚子十二。兩片深藏毛裏

避。天下莫隱。於十二鬚子。評云。且君之欲見

之也何爲也哉。

使いなるかな、使いなるかな

ヒゲ面の人を擲掄った、次のような話がある。

ある教え子が、先生に質問した。

「『論語』学而篇の一節」『学びて時にこれを習ふ（学而時習之）』という箇所に出てくる三つの『乎』[hi]』という字（訳者注：『訳解笑林広記』第九七話「一般鬚」に引かれているのと同じ箇所を指す。つまり「不亦説乎」「不亦樂乎」「不亦君子乎」の三つ。）と、（同じく『論語』学而篇の一節）『吾日に三たび吾が身を省みる（吾日三省吾身）』という箇所に出てくる三つの『乎』[hi]』という字（訳者注：これも『訳解笑林広記』の例と同じ箇所を指す。つまり「為人謀而不忠乎」「與朋友交而不信乎」「傳不習乎」の三つ。）には、違いがあるのでしょいか。」

はないか」と無理に解釈することもできようが、いずれにしても曲解（こじつけ）である。左訓「ヨロコバシキヒゲデハナイカ」[悦ばしきヒゲではないか]。○不亦樂乎 [bù yì lè hū] = 『論語』学而篇の一節。「樂」は「楽」の本字。通常「亦樂しからずや」と訓読するが、(こ)は「乎」[hū]を「鬚[hū]と曲解し、[また樂しからずヒゲ]「また樂しいではないか、というヒゲ」という意味になる。左訓「オモシロキヒゲデハナイカ」(面白きヒゲではないか)。なお、前掲『經典余師(四書之部)』は「亦樂ま不ん乎」と読み下している。○不亦君子乎 [bù yì jūn zǐ hū] = 『論語』学而篇の一節。通常「亦君子ならずや」と訓読する。ここでは「また君子ならずヒゲ」という意味。左訓「クンシンノヒゲデハナイカ」[君子のヒゲではないか]。『經典余師(四書之部)』は「亦君子ならず不ん乎」と訓む。○為人謀而不忠乎 [wéi rén móu ér bù zhōng hū] = 『論語』学而篇の一節。孔子の高弟、曾子の言葉。通常「人の為に謀りて忠ならざるか」(人のために何かをしてあげようと考えたとき、真心を込めなかったことはいいか(と、私は一日に三回反省する))と訓む。ここでは、「人のために何かをしてあげようと考えたとき、真心を込めなかったヒゲ」という意味。和刻本は、「而不忠乎」に左訓「シンセツノナイヒゲ」[親切のないヒゲ]を附す。なお、『經典余師(四書之部)』は「人の為に謀て忠ならず不ん乎」と訓読する。○與朋友交而不信乎 [yǔ péng yǒu jiāo ér bù xìn hū] = 『論語』学而篇の一節。通常は、「朋友と交りて信ならざるか」(友だちと接するとき、誠意に欠けたのではなかったか(と、私は一日に三回反省する))と訓読する。ここでは、「友だちと接するとき、誠意に欠けたヒゲ」という意味になる。和刻本は「不信乎」に左訓「マコトノナイヒゲ」(信のないヒゲ)を附す。『經典余師(四書之部)』は「朋友と交りて信ならず不ん乎」と訓む。○傳不習乎 [chuán bù xī hū] = 『論語』学而篇の一節。「傳」は「伝」の正字(旧字体)。通常は、「習はざるを伝ふるか」(自分で深く熟考し、しっかりと身につけたものでないものを、人に教えたことはないだろうか(と、私は一日に三回反省する))と訓読する。ここでは、「しっかりと修得していないものを人に教えたヒゲ」という意味。『經典余師(四書之部)』は「傳て習不ん乎」と訓む。○君子者乎 [jūn zǐ zhě hū] = 『論語』先進篇の一節。通常は、「(論の篤きに是與すれば)君子者か(色莊者か)」「(弁舌の善し悪しだけでは)本当に徳を備えた君子であるのか(ただうわべを飾るだけの見かけ倒しなのかは、識別できない))と訓読する。ここでは「本当に徳を備えた君子であるヒゲ」という意味。『經典

余師(四書之部)』も「君子者乎」と訓む。○色莊者乎 [sè zhuāng zhě hū] = 『論語』先進篇の一節。本来は「色莊者か」(ただうわべを飾るだけの見かけ倒しなのか(識別できない))という意味。ここでは、「ただうわべを飾るだけの見かけ倒しヒゲ」という意味。『經典余師(四書之部)』は「色莊者乎」と訓む。○使乎使乎 [shǐ hū shǐ hū] = 『論語』憲問篇の一節。通常は、「使なるかな使なるかな」(まことに立派な使者だなあ、まことに立派な使者だなあ)と訓読する。ここでは、「(まことに立派な)使者ヒゲ、使者ヒゲ」という意味。『經典余師(四書之部)』も「使なる乎使なる乎」と訓む。○上面的鬚。與下面的鬚。搥搥一般。= 上の方のヒゲも、下の方のヒゲも、結局は(同じように)普通である。「搥」は「搥」の異体字。「搥是 [zōngshì]」は、「結局」「つまり」「どのみち」という意味の副詞。「一般 [yībān]」については、前述の通り。「同じ」という意味で用いられることが多いが、ここでは笑いのオチとして、「良いヒゲ」「悪いヒゲ」そして今度は「(上のも下のも)並のヒゲ」と解しておく。和刻本は、この文全体に、左訓「ウヘノホウノヒゲモ シモノホウノヒゲモ ミナオナジコトジャ」(上の方のヒゲも、下の方のヒゲも、皆同じことじゃ)を附す。

補注

この話は、『絶纓三笑』卷四・儒笑七九(第六七三話「使乎使乎」(本文および注「一云」)、『笑府』卷十(第四五二話「一般鬚」)に類話がある。『絶纓三笑』及び『笑府』の原文は、以下の通りである。それぞれ文意は同じだが、『絶纓三笑』第六七三話(本文)のみ、文章が比較的大きく異なる。『絶纓三笑』については、第六七三話「使乎使乎」(本文)と「一云」注の拙訳を示す。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一一六―一一七頁)を参照。

なお、「鬚子評林」以下の注に見える文章は、『笑府』第四五三話「鬚子答嘲」(注)とほぼ同文であり、類似のものが『笑林評』『李卓吾先生批点四書笑』にも掲載されている。『笑府』の日本語訳は、同じく前掲『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一一八―一二〇頁)を参照されたい。

【訳者注】同じように、「乎[hū]」を近似音の「鬚[hū]」(ヒゲ)と読み替えれば、右の本文は、それぞれ「不忠ヒゲ」「不誠実なヒゲ」「いい加減なことを教えたヒゲ」という意味に聞こえてしまうのである。

(また、『論語』先進篇に見える)「君子者ヒゲ(君子者乎[jūnzǐ zhě hū])」「色莊者ヒゲ(色莊者乎[sè zhuāng zhě hū])」この二つのヒゲは、一つは「よいヒゲ」であり、一つは「悪いヒゲ」である。

【訳者注】やはり同様に、「乎[hū]」を近似音の「鬚[hū]」(ヒゲ)と読み替えれば、前者は「立派な君子のヒゲ」、後者は「うわべを取り繕うだけの偽善者のヒゲ」という意味に聞こえてしまうのである。

(これを聞いた)ある人が、(それでは、『論語』憲問篇の一節に見える)「使いなるヒゲ、使いなるヒゲ(使乎[shǐ hū shǐ hū])」というのは、どうなりますか、と質問した。そこで(さっきの人は)こう答えた。

「上のヒゲと、下のヒゲは、いずれにせよ、どちらも同じ『普通のヒゲ』じゃ。」

【訳者注】この二つのヒゲは、「乎」に掛かる文字(「使」からは、「よい」とも「悪い」とも解釈することができないので、よくも悪くもない「普通のヒゲ」と解釈せざるを得ない、というわけである。ただし、「下のヒゲ(下面的鬚)」という言い方が、かなり下がったニュアンスを伴うところが味噌である。

【和刻本割注(表題下)】「鬚[hū]」(ヒゲ)は、「乎[hū]」と音通である。

【訳者注】右の割注は、和刻本の施訓者、遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。「乎」「鬚」の二字は発音が近いので、同義語として代用しうる、ということ。つまり、「乎」と「鬚」は掛詞として理解しなければならぬ、と言っているのである。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三二丁表裏)。「新鐫笑林広記」卷之四・形体部(第二二九話、四丁裏)。○一般鬚[yībān hū] = (〜と)同じヒゲ。普通のヒゲ。「一

般[yībān]」という語は、現代中国語「一樣[yíyàng]」(〜と同じ)の意味で用いられることが多く、本話末尾においても「與(〜と)」という助字(前置詞)と呼応して用いられていることから、「〜と同じ」という意味である蓋然性が高い。『笑府』所収の類話(第四五二話「一般鬚」)にも同様の表現が見える。しかし、「一般[yībān]」には「普通の」「通常の」という語義もあり、本話においては、「よいヒゲ」「悪いヒゲ」に対する「(よくも悪くもない)普通のヒゲ」という意味にもなり得ることに注意したい。その方が、笑話のオチとしては腑に落ちる。○「鬚與乎通」(割注) = この割注は、和刻本の施訓者、遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。「鬚[hū]」は「乎[hū]」と発音が近い、音通である、(発音が近いので、言い換えとして)通ずる、という意味。○聚論[jù lùn] = (人が)集まって、議論をする。左訓「ヨリアヒハナス」(寄り合ひ話す)。○講[jiāng] = 話す。現代中国においても、特に南方では、おそらく方言語彙の影響であろうが、北方の口語「説[shuō]」(しゃべる意)の代わりに「講[jiāng]」という動詞が頻繁に使用される。ただし、現代中国語では「讲」(簡体字)と表記される。『論語』は、孔子の語った言葉を集めた語録であるから、ここでは『論語』という書物の中で、孔子は「ヒゲ」のことばかり「講(話している)」という意味。左訓「イフ」(言ふ)。○開章[kāi zhāng] = (『論語』の)最初の章が始まったところ。巻頭の一章。全二十篇から成る『論語』の冒頭「学而第一」は、「子曰。學而時習之。不亦説乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。」という一節から始まる。左訓「ハシメ」(初め)。○不亦悦乎[bù yì yuè hū] = 『論語』学而篇、冒頭の一節。通常「不亦説乎」と記載される。この場合の「説」は、「説[shuō]」(言つ)ではなく「悦[yuè]」(よろこばしむ)と発音され、「また悦ばしいことではないか」という意味になる。一般的に「亦説しからずや」と訓読されるが、江戸時代における『論語』の解説書である『經典余師(四書之部)』(天明九年(一七八九)刊)は「亦説び不ん乎」と訓んでいる。「乎」は反語の助字であり、日本語の「か」「や」に相当する。ただし、本話は、「乎[hū]」を「鬚[hū]」(ヒゲ)という意味に曲解する(こじつける)という笑い話であるから、「不亦悦乎」(また悦ばしからずや)は「不亦悦鬚」(亦悦ばしからずヒゲ)という意味になる。「不亦悦乎[bù yì yuè hū]」という気持ちで読むとすれば、「また悦ばしからずやヒゲ」「不亦悦鬚乎[bù yì yuè hū]」という気持ちで読むとすれば、「また悦ばしきヒゲで

表現は、「抛錨」(碇を下ろす)という意味にも聞こえる。つまり、「pāo miào」という中国語の両義性を生かしたダジャレとなっているのである。和刻本は、左訓「イカリヲナゲコム」(碇を投げ込む)を附し、文字通りの意味でない方の、裏の意味を解説している。○「毛」音全猫(割注)＝「毛[mào]」という字は(その発音が「猫[māo]」という字と同じである。この割注は、中国原本に存する原注である。ただし、「毛[mào]」と「錨[mào]」は、現代中国語(普通話)でも完全に同音だが、「毛[mào]」と「猫[māo]」の二字は、声調が異なる。蘇州方言(呉方言)で完全に同音であるかどうかは、未詳。あるいは、「猫」は「錨」の草体(異体字)か。「全」は「同」の異体字。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纓三笑』『笑府』、和刻本『笑府』等に類話はない。

余説

ここからは、「形体部」＝「人間の身体的特徴に関する部門」に属する話が始まる。「形体部」第一話は「ヒゲ」の話。暴風のために転覆しそうになった舟の中で、和尚と道士は、神様に救いを求め、お経を川に投げ込んでいる。しかしヒゲの男は、川の神様に捧げるべきものを何も持ち合わせていなかったため、ひたすら自分のヒゲを抜いては川にバラリバラリと投げ込んでいる。和尚と道士が「その意は」と訊ねたところ、「ワシは『毛を投げ込んでおる(抛毛[pāo máo])』」＝『碇を下ろしておる(抛錨[pāo miào])』のじゃ」と答えたという話である。

したがって、この話の「笑いのツボ」は、「抛毛[pāo máo]」「抛錨[pāo miào]」という語の両義性を生かした中国語のダジャレにある。当代きつての中国語通であった遠山荷塘好みの話柄と言うべきであろう。

⑨7 一般鬚(普通のヒゲ)

原文

一般鬚「鬚與乎通」

兩人聚論。論語一書。皆講二鬚子。開章就說。不亦悦乎。不亦樂乎。

不亦^二君子^一乎。這^レ三個^ハ都^ナ是^レ好^キ鬚。為^レ人^ノ謀^テ而^レ不^レ忠^乎。與^二朋友^一交^テ而^レ不^レ信^乎。傳^レ不^レ習^乎。這^レ三個^ハ是^レ不^レ好^キ鬚。君子者^ハ乎。色^ニ莊^{ナル}者^ハ乎。這^二兩^一個^ノ鬚^ハ一^ハ好^ク。一^ハ不^レ好^{カラ}。或^人問^フ使^乎使^乎。答^曰。上^一面^一的^ノ鬚。與^下面^一的^ノ鬚^一。摠^是一^般。

書き下し文

「一般鬚「鬚は乎と通ず」
兩人聚論す。論語一書は、皆鬚子を講ず。開章、就ち説く亦悦ばざらんや。亦樂からずや。亦君子ならずや。這の三個は、都是好^キ鬚。人の為に謀て忠ならずか。朋友と交て信ならずか。習はざるを伝るか。這の三個は、是好^キ鬚ならず。君子者か。色^ニ莊なる者か。這の兩個の鬚は、一は好^ク。一は好^{カラ}らず。或ひと使なるかな。使なるかなを問ふ。答て曰く。上面^一的^ノ鬚。下面^一的^ノ鬚と。摠て是一^般。

現代語訳

二人の人が、寄り集まって議論している。(そのうちの一人が、次のように主張した。)『論語』という書物は、すべてヒゲのことを語ったものである。冒頭の一章(学而篇)からして、いきなり「亦説はしからずヒゲ(不亦悦乎。[bù yì yuè hū])」「亦樂しからずヒゲ(不亦樂乎。[bù yì lè hū])」「亦君子ならずヒゲ(不亦君子乎。[bù yì jūnzǐ hū])」と言っているが、この三つのヒゲ(「乎[hū]」＝「鬚[hū]」は、いずれも皆「よいヒゲ」である。

【訳者注】「乎[hū]」を近似音の「鬚[hū]」(ヒゲ)と読み替えれば、右の本文は、それぞれ「悦ばしいヒゲ」「楽しいヒゲ」「君子ヒゲ」という意味にも聞こえてしまうからである。

(また、『論語』学而篇の一節に見える)「人の為に謀りて忠ならざるヒゲ(為人謀而不忠乎。[wèi rén móu ér bù zhōng hū])」「朋友と交わりて信ならざるヒゲ(與朋友交而不信乎。[yǔ péngyǒu jiāo ér bù xìn hū])」「習はざるを伝うるヒゲ(傳不習乎。[chuán bù xī hū])」の三つのヒゲは「悪いヒゲ」である。

【和刻本割注(表題下)】「猫」は、「梔」のことである。

【訳者注】右の割注は、原本の表題「抛猫」に見える「猫」[māo]という字が、「ネコ」という意味ではなく、音の近い「錨」[māo] (舟をつなぎ止めておく)「かり」の意であることを注記したもの。なお「梔」[ding]は「碇」[ding]の音通として使用されている。「梔」[ding]の原義は「沈丁花に類する香木の名」。

【和刻本割注(文末)】「毛」[máo]は、「猫」[māo]と同じ発音である。

【訳者注】右の割注は、中国原本に見える原注である。「毛」[máo]と「猫」[māo]は現代中国語では声調が異なるが、『笑林広記』の編者(中国江南地方、蘇州の人)が使用していた官話または蘇州方言では同音であったということ。要するに、「毛」という言葉が「ヒゲ」と「錨」の掛詞になっていることを指摘したものである。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三二丁表)。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部(第二二三話、三丁表)。○形体部[xīngtǐ bù] = 「(人間)の身体」に関する笑話を集めた部門。「體」は「体」の本字。ヒゲに関する話から始まり、盲人・聲啞・近視・吃音など、身体的な障害を笑う話が多く含まれる。『笑府』卷十「形体部」に同名の部門がある。中国原本『新鐫笑林広記』には「形体部」として一〇五話収録されているが、和刻本はそのうちの二三話を採録する。なお、遠山荷塘は、和刻本「譯解笑林廣記目次」(二丁表)において、「形体部」を「啞子聲兒鵠舌鰓鼻等ノ語言動作ノ可笑コトラアツム」(形体部には、口がきけない人・耳の不自由な人・吃音の人・嗅覚に異常のある人などの、おかしい話し方、おかしい行動の仕方に關する話を収録する。)と説明している。○抛猫[pāo māo] = ほうまは。「抛錨[pāo māo]」(碇を下ろす)という意味。抛[pāo]の原義は「投げる」「放る」。和刻本には、「猫即梔也」(「猫」は、「梔」[ding] = 「碇」[ding]のつづである。)という、遠山荷塘による割注が附されている。○道士[daoshi] = 道教の修験者。和刻本「譯解笑林廣記目次」(二丁裏)「僧道部」の説明文中に、遠山荷塘は「道士」という読みを示している。「カダシ」とは、「加持祈禱を行う修験者」の意。○鬚子[húzi] = 本来は「口ひげ」の意。

ここでは、「口ひげを生やしている人」という意味で用いられている。なお、一般的に「ヒゲ」の総称を「鬚鬚[húxū]」と言うが、本来「鬚」[xū]は「顎ひげ」を指す。○過江[guò jiāng] = 川を渡る。「江[jiāng]」は「大きな川」の意。「小さな川」は「河[hé]」と言う。○僧道[sēng dào] = (川を渡るために同じ舟に乗り合わせた)僧侶と道士。「僧道」という語は、「(一般庶民とは異なる)僧侶や道士」という意味の普通名詞として用いられることもあるが、ここはそうではなく、前出の登場人物二名を指す。そのことを明示するために、和刻本は「僧」「道」の二字の右横に、それぞれ別個の縦線「一」を附している。この傍線は、二字が一語であることを示す「連字符号」(例えば「僧道」など)とは逆の機能を果たしていると言えよう。○急把経巻掠入江中 = 慌ててお経を川の中に放り込んだ。「把[bǎ]」は、「を」という意味の前置詞(介詞)。動詞の前に目的語を置いて目的語をどのように処置するかを示す「処置式文」(「把」構文)を構成する。日本語の「を」に相当。和刻本は、「把」に右傍訓「ヲ」を附す。「掠[lüè]」は、「放る」「投げる」の方言語彙。『金瓶梅詞話』第二八回に「分付春梅。趁早與我掠出去。春梅把鞋掠在地下。看着秋菊說道。賞與你穿了罷。」(そうして、春梅にいつけ、「早いところ、こいつをほうり投げておしまい」春梅は靴を地べたにほうり投げると、秋菊のほうを見ながら、「ほら、お前さんにくれてやるよ」という用例がある(日本語訳は、『金瓶梅(三)』(小野忍・千田九一訳、岩波文庫、一九七三年、一三三頁)による)。和刻本は、「掠」字に左訓「ツカミコム」(掴み込む)を附す。○求神救護[qiú shén jiùhù] = 助けを求めて、神に祈る。中国語では「求神」「救護」という二字ずつの語構成となっているため、和刻本のように「神の救護を求む」と訓読するのではなく「神に救護を求む」と訓まなければならない。私に修正して書き下した。なお、和刻本は、「求」字に左訓「イノル」(祈る)を附す。○惟將鬚鬚逐根拔下 = ただヒゲを一本一本、抜いているだけであった。「將[jiāng]」は、前出の「把」と同じく、「を」という意味の前置詞(介詞)。「把」が口語的な表現であるのに対し、「將」は文語的な言い方。和刻本は、「把」字と同様、「將」字に右傍訓「ヲ」を附す。また、和刻本は「逐根」に左訓「ノコラス」(残らず)、「拔下」に左訓「ヌイテ」(抜いて)を附す。「拔」は「抜」の俗字。「拔」は「抜」の正字(旧字)。常用漢字「抜」は「抜」の略字である。○抛毛[pāo máo] = (ヒゲの一本一本の)毛を(川の中に)投げ入れる。「毛」[máo]は、「碇」という意味の「錨」[māo]と同音のため、「抛毛」(毛を投げ入れる)という

『訳解笑林広記』全注釈（八）

川上 陽介（工学部教養教育）

序

本稿は、『訳解笑林広記』全注釈（一）（『富山県立大学紀要』第二六卷、二〇一六年三月）、「同（二）」（『富山県立大学紀要』第二七卷、二〇一七年三月）、「同（三）」（『東アジアの古典文学における笑話』、新葉館出版、二〇一七年一〇月）、「同（四）」（『富山県立大学紀要』第二八卷、二〇一八年三月）、「同（五）」（『富山県立大学紀要』第二九卷、二〇一九年三月）、「同（六）」（『富山県立大学紀要』第三〇卷、二〇二〇年三月）、「同（七）」（『富山県立大学紀要』第三二卷、二〇二二年三月）の続稿である。前稿に引き続き、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』（文政十二年（一八二九）刊、半紙本二卷二冊、全三〇五話）第九六話から第一一〇話までの原文・書き下し文・日本語訳・注釈を掲載する。

和刻本『訳解笑林広記』及び中国笑話関連資料の諸本、底本、凡例等については、第一稿を御参照頂きたい。『富山県立大学紀要』所収の論稿は、すべて富山県立大学附属図書館ホームページによる閲覧及びダウンロードが可能である。

96 抛猫（碇を下ろす）

原文

形體部

抛猫「猫即碇也」

道士和尚鬚子三人過江。忽遇狂風大作。舟將顛覆。僧道慌忙。求神救護。而鬚子無可擲得。惟將鬚鬚一逐根拔下。投于江内。僧道問曰。你拔鬚何用。其人曰。我在此

此抛猫「音全猫」、イカリヲナルコム

書き下し文

形體部

猫を抛つ「猫は即ち碇也」

道士和尚鬚子三人江を過ぐ。忽ち狂風大に作るに遇ふ。舟將に顛覆せんとす。僧道慌すること甚し。急に経巻を江中に掠入し。神に救護を求む。而して鬚子擲げ得べきもの無し。惟鬚鬚を逐根拔下し。江内に投ず。僧道問て曰く。你鬚鬚を抜く何の用ぞ。其の人曰く。我此に在て毛を抛つ「音猫と同じ」、

現代語訳

（道教の修験者である）道士と、（仏教の修行者である）和尚と、口ヒゲを蓄えた男、以上の三人が（同じ舟に乗り合わせ）川を渡ることになった。ところが、忽ち荒れ狂う風に見舞われ、舟が転覆しそうになった。道士と僧侶は、「あらま、あらま」と上を下への大騒ぎ。（修行のために持ち歩いていた）お経を川の中にドボンと投げ込み、「あら助け給え」と神の御加護を賜らんとした。ところが、ヒゲの男は投げ込むものが何もないので、ただ自分のヒゲを一本一本、根こそぎ抜いては川の中に投げ込んでいた。和尚と道士が、

「お前がヒゲを抜いたところで、いったい何の役に立つと言うんだ。」と訊ねたところ、ヒゲの男はこう言った。

「私はな、ここでこうして、『毛を投げ込んでおる（「抛毛 [pāo máo]」）つまり『碇を下ろしておる（「抛锚 [pāo máo]」）のじゃよ。』